
たぶんネギま

棕鳩九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぶんネギま

【Nコード】

N5212P

【作者名】

棕鳩九

【あらすじ】

目が覚めたらデカイ容れ物の中にいた。自分が何者かも分からないまま、手がかりである『声』をたよりに頑張っていく。

*注

作者は遅筆。展開も遅い。

原作始まるまでに時間かかるかも。

少女のプロローグ（前書き）

友人に勧められて書いてみた。
とりあえず完結目指したい。

少女のプロローグ

熱い。

体中が燃えるように熱かった。

痛みよりも早く来た熱は既に全身を刻んでいる。

片腕は辛うじて繋がっていた。

左足の腱はとうの昔に切り取られた。

自慢だった腰まで届く髪は炎でちりぢりになり、もはや肩口までしかない。

ふわふわした洋服は見る影もなく、使い古した襦袢ほろのようにズタズタだ。

痛い、痛いよ。

自由になる右足と左手を使って、弱々しく這いずりながら私は逃げる。

なんでだろう。

どうしてだろう。

わたしは何かしたのだろうか。

答えを期待して言葉にしたわけではなかった。

けれど、おぼろげな意識の中、わたしが言えることはそれ以外になく、当惑のように、錯乱のように、執着のように、口にしていた。集中していたのだ。

逃げることもよりも怨みを言うことに。

だから、次に来た衝撃に対して何の備えもすることが出来なかった。

「——そうさな、強いて言うなら、運が悪かった。それだけのことだよ、譲ちゃん」

今までを遥かに超えて、背中とお腹に熱と激痛が奔った。

「がつ、あああああああああああああああああ！」

剣で床に縫い付けられたと分かったのは、後ろを振り向いたからだ。

鈍く光る刀身は私の顔を映していて、身動きすれば体を両断しそうな程太かった。

「まったく、手間かけさせないでくれよ」

わたしを貫いた大剣の持ち主は、柄から手を放さないまま、足で私の顔を固定する。

土とゴムの匂いがした。

男はへえ、と感嘆を漏らす。

「思ったよりもずっと美人だな譲ちゃん。火傷がキツくてよく分かってなかったが、将来は誰もが振り返る良い女になれただろうよ」

声から男だと判断したが、顔の造形までは見えない。

輪郭が分かるだけだった。

焦点が定まらない。

「まあそうなったらそうなたで魔女扱いだったろうがな。そう考えれば、最初に会ったのが俺だったのは、案外悪くないかもしれないぞ。他の連中なら、その容姿を別のことに使ってから殺したかもしれない」

男が何かを言っているが、それさえも聞こえなくなってきた。
身体が暖かいものに包まれているような感覚だけが残っている。
ごぶつ、と口腔に鉄の味が溢れる。

ああ、とても美味しい

「……俺の名前はウィリアム・アーサーだ。恨んでくれて構わんし、呪ってくれてもいい」

男は自らの腰に左手を回して、短剣と思しき塊を取り出した。
それを持ったまま腕を振り上げる。

一瞬、何かが私の頭の中を過ぎ^よったけれど、結局それが何なのか分からなかった。

「結局いつか忘れるような、どうでもいい出来事だ」

男は振り下ろす。

「じゃあな」

＊＊

難儀な仕事だ。

ウィリアム・アーサーは常にそう思う。

一心不乱に振り続けた剣や、超常のそれは何の為に得たのか、もう覚えてやしない。

殺すことで金を得ては、酒と女に消えていく。
そんな生活を何年も過ごしてきた。
それはこれからも変わらない。

今回だつて同じことだ。

今までよりもヒトに近い姿をしているが、この少女とて怪物には
変わりない。

“成り立て”である以上、苦戦することなかった。
容易くその命を奪える。

……明日は、少し高い酒を飲むことにするか。

腰に付けたホルスターから鐔の無い剣を取り出す。

投擲用の純銀のナイフだ。

この距離だ。

外さない。

「じゃあな」

振り下ろされたナイフは、少女の薄い肉を裂き脆い肋骨を砕いて、
心臓に突き刺さる。

——その筈だった。

肉を割いた音も骨を砕いた音もせず、少し高い音が響いた。
投げた短剣は少女に当たらず、床に突き刺さっている。
おかしい、と思つて左手を見ると、

「は？」

ウィリアムの腕には一柱の赤黒い氷の棘が生えていた。

血で出来た氷は、瞬く間に肩口まで覆い尽くすと、パキンと軽快な音を立てて、粉々に砕け散る。

左腕もろともだ。

「なあ?!」

目の前ではかつて自分の腕だったものが、炎で出来た明かりを反射して輝いていた。

待て、今回の標的は……。

「ちっ!」

咄嗟に後ろに下がる。

ウィリアムに追隨するかのように、氷の幕を一本の輝く矢が打ち抜いた。

光の矢は氷に触れたかと思うと、乱反射し、幾条にも分かたれて、ウィリアムを貫く。

「ぐっ!」

ウィリアムは左の肩口と全身の穴が発するショックから立ち直ると、矢の飛んできた方を見た。

少女ではない。

少女はまだあの技術を持っていない。
持っていたら自分が敵うはずがなかった。
少女はもはやそういう存在だ。

ならば答えは決まっている。

第三者の介入。

いや、どちらかといえば当事者が正しいかもしれない。

視界の端では、少女にも、ウィリアムよりかなり少ないが矢が刺さっていた。

とはいえ、あれぐらい傷は——未だ少女に突き刺さっている剣も含めて、死んでいなければどうとでもなるだろう。

攻撃の目的は自分を少女から離れさせることだ。

「不意打ちとはやってくれるな」

コツコツと音を靴と杖を鳴らしながらやってくるそいつを見ながら、ウィリアムは事前に知らされたこととの違いを修正していた。

白く染まった髪と疲れ切った顔はその男を年齢よりも年老いて見せていた。

まずは容姿が違う。

白髪ではなかった。

この程度は別にいい。

だが、あんな攻撃手段があるとは聞いていない。

完全な、研究職だったはずだ。

あのタイミングで合わせられる技術があるだなんて初めて知った。知っていれば、少女のことは後に回してでも男の方を狙っていた。

——くそ豚どもが。

脳裏に浮かぶのは、他者を貶めることしか考えていない屑たちの姿。

本当に知らなかったのか、あえて知らせなかったのか。

そのどちらかで今後がかなり変わってくる。

あえて知らさなかったのであれば最悪だ。

受けてきた依頼は胸を張れる内容ばかりではない。

生きていては困る、死んでも構わないと、そう判断されていたら、姿を暗まさなければならぬ。

最悪国を出ることになるだろう。

——いや、今考えなければならぬのは他にあるな。

敵の脅威はまだ去っていないのだ。

ウィリアムは逸れかけている思考を振り切った。

「残念だったな、もう少しで成功したつてのによ」

老人に片足突っ込んだ見た目の男は、既に少女の傍に来ている。

少女に何かをしている男を尻目に、ウィリアムは軽口を言いながら、自分の状況を確かめた。

左腕は肩から先がない。

血は皮肉にも氷で止められているが、血液の温度は決して低くはないので、長くは持たない。

身体に刺さっていた光の矢は既に消えているが、当然痕は残っている。

拡散した分、威力は落ちていくらしく浅いとは言いが致命傷ではないし、何より筋肉の腱や足に一つも当たらなかったのは大きい。

だが、その分出血が厳しかった。

傷の数が多く、全てを止血することが出来ない。

切り札がないわけではないが、アレは回復に時間がかかりすぎる。残っている武器は短剣が一本のみ。

出血による後遺症が出る恐れを鑑みれば、接近の、短期決戦が望ましい。

だからといって殺すことは出来ない。

教会が悪魔・魔女の業と言おうが不老不死、その一つに辿り着いたのだ。

この男を生け取りにすることが今回の仕事である。

下手に殺してもしたら、こちらが依頼主に罅り殺されるだろう。

片腕は無いので身体のバランスが非常に取りにくく、無視出来ない傷の為に短期決戦が必要で、しかも殺すことが出来ないくせに抵抗手段を奪わなければならない。

そしてそもそも、今回の仕事で報酬が支払われるかさえ怪しくなってきた。

「まったく、難儀な仕事だよ」

右手に持ったナイフを構えて、ウィリアムは前に飛び出した。

＊＊

「エヴァ、飲みなさい」

誰かが何かを言っている。

時間を置かずに、液体が落ちてきて、わたしの頬を伝い、口の中に入ってくる。

粘性の高いその液体は、今の私の体の具合も含めて、飲みやすいとは言い難い代物であった。

にも関わらず、

——ドクン。

一度嚥下した瞬間、熟成されたワインのような芳醇さが、わたしの脳天に圧倒的とも言える衝撃を以て押し寄せた。

美味しい。

私は必死に顔を動かして、一心不乱にそれを飲みつづけた。
美味しい。

味も香りも今まで飲んだどんな飲み物より勝っていた。

——ドクン

さつきまでとは違う熱さがわたしの体を覆う。

その烈しさは、決して痛みではない。
はげ

その凄まじさは、決して苦しみからではない。
心地好い熱さだ。

「エヴァ。少し、響くぞ」

声が聞こえた。

まるで何十年振りにさえ思える懐かしさで、その声は私の耳に届いてくる。

知っている。

わたしはこの声の主を知っている。

「あ、ぐうつ！」

剣が私の体から引き抜かれた。

自由になった体は、剣に少し引つ張られて浮き上がり、抜けた時、

ごろんと転がって仰向けになった。

思考がクリアになっていく。

霞みがかかっていた視界もはつきりと視える。

お腹には剣の刺さった跡があった。

その風穴から血が勢い良く飛び出して、わたしから温度を奪おうとする。

けれど、穴の周りにあの熱が灯ったとき、信じられないことが起こった。

何故か出てくる煙と共に、穴が塞がっていくのだ。

「うん、第二段階は成功だな。——おっと」

ギン、という音が大気を震わせた。

金属同士がぶつかり合う音だ。

はっとして、私はまだあまり自由にならない手足を動かそうとした。

大剣の持ち主は去っていない。

逃げなければ。

わたしは右腕に力を入れて、起き上がる。

「え？」

ぐるん、と体が回転した。

疑問を解決する余地もなく、顔面が床に叩きつけられる。

「つつつ……」

顔をしかめながらも、今度こそ私は起き上がろうとして、

「あう」

またしても床に挨拶をした。

この時僥倖だったのは、彼女の頭の中に無数に湧く疑問符に対して、不快感や焦燥感は一比例して段々と薄れてきていたことだ。

これは別に彼女がアーパーであるとか、エクラッシャーな同情したくなる神経を持ち合わせているわけではない。

彼女は元々運動神経が優れているわけではなく、どちらかと言うと、むしろ悪い方に類していた。

一度習得してしまえば、そこから応用に発展出来る知性を持ち合わせていたが、嗜むべきものとして教えられていた作法の内、歩き方に関しては転んでドレスを駄目にしてしまった苦い経験が何度もある。

言っでは何だが、彼女にとって「転ぶ」というのは慣れ親しんだことであつた。

つまるところ、彼女はルーティンに似た感覚で日常の冷静さを取り戻しつつあつたのだ。

当然そこには、慣れない痛みや初めて感じたリアルな死、それらが彼女から遠ざかったことも関係している。

剣が抜かれた時でも傷が治った時でもなく。

彼女は冷静になることで、生に通ずる道に一步、足を踏み入れた。

——決れている。

わたしはどうして体が回転したのか、床に残る跡から導き出そうとしていた。

金属音と時折大気を揺らす爆発は遠ざかりはしたものの、未だに強く自己主張し、わたしの体を震わせる。

早く逃げた方がいいのは重々承知している、だけど今は立つこともままならない。

床には横一直線の傷が走っていた。真ん中に行く程深くなり、両端は浅い。

他にも、剣が突き刺さっていたのとは別に、二つ穴がある。

さっきまでわたしの両手が埋まっていた。

回転した理由——答えなんて、至極簡単だ。

「……」

わたしは恐る恐る、手の平を床に叩き付けた。

力はあまり込めていない。本来なら、子供の細腕なら、軽い音が鳴るくらいのものだ。

「わぁ！」

揺れた。

床はわたしの手を中心に、円を描いて陥没していた。確信する。

「力が、強すぎるんだ」

わたしは自分の手を握った。

集中しているからか、脈の動きが分かった。

拳を開く。

手は明かりのためか少しばかり透けていて、青い管が見えた。

「は、ははは。そっか」

思い出した。

あの声はわたしの叔父だ。

そして、思い知らされた。

大剣の男に貫かれた時とさつき叔父に液体を飲まされた時の、多
幸感。

在り得ない勢いで治っていった傷に、強すぎる肉体。

わたしは頬を拭う。

手の甲には赤い、真紅の血が付いていた。

「わたしは吸血鬼になったんだ」

彼が、いや——あいつが、わたしを化け物にした男だ。

少女のプロローグ（後書き）

誤字報告。

感想、指摘待ってます。

*エヴァの一人称を「私」↓「わたし」へ

少年のプロローグ

ふわふわ揺れて、ゆらゆら漂う。

そうして、意識の海から浮かび上がった。

初めて目にしたのは明るい緑色だった。

泡が視界に入っては上に消えていく。

見上げようとして、けれど意思に反して首は微動だになかった。

手足は……どうやら動きそうだ。

赤ん坊のそれよりも更に遅く、感覚に身体がまるで追いつかないけれど。

鉛の服を着ているみたいだった。

此処はいつたい何処なんだろうか。

鈍くはあっても、さほど抵抗なく身体は動いた。

僕を覆っているコレは何なんだ、とそこまで考えて——ああ、と納得した。

水、いや液体か。

泡は……そうか、口から出ているのか。

僕はようやく、自分がどんな格好をしているのか理解した。

身体の各部位を機械に繋がれて、緑色の溶液で満たされたケースの中に入っているのだ。

そうして思い出した。

僕は——誰だ？

＊＊

——かつて僕は。。。。だった。

くそつ。

そこまでしか思い出すことが出来ない。

今とは違う肉体があったと理由もなく僕は確信していた。

それはたぶん一種の閃きに近い天啓に似た何かで、きっと僕以外の誰にも理解できないだろう感覚だ。

果たして、それが幸運のことなのかはさておく。

けれど今現在、非常に面倒なことになっていることだけは分かった。

僕は問いかける。

他でもない、自分に。

僕はいったい誰だ？

——かつて僕は。。。。だった。

頭の中で言葉が響く。

僕が以前誰だったのか、もしくは何だったのか、その肝心要の『名前』の部分にノイズが走っている。

しかも壊れたレコードのように同じ答えしか返ってこない。

気分が悪い。

とはいえ、今はまだ確たる解決手段が見つかっていない。

返ってくる音についても、そもそも此の緑色の液体から抜け出す術もない。

何もかもが分からない。

かつて、と言うのなら今はなんなのか。
この身体は誰なのか。

そもそも、この言葉には信憑性がない。
情報が少なすぎる。

時間がかかりそうだ。

それに、何故だかとても眠い。
声が響いてから、少しずつ頭に靄もやが掛かってきているような違和感
があった。

まったく、いらいらする。

僕は押し寄せる睡魔に身を委ね、ゆっくりと瞼を閉じた。

——僕は夢を見るんだろうか。

とりとめのない、そんなことを考えながら。

＊＊

世界には魔法が存在する。

超常のそれは、何も無いところから火や水や木や土を生み出した。
生活の一部としても利用され、彼ら彼女らは巫女とも神子とも呼
ばれては、祭事や政に深く根付いていた。

その能力は、人間だけには留まらない。

あるいは竜、あるいは鬼、あるいは呪い。

生物として、現象として具現し、幸いにも災いにもなりえた。

不思議で、神聖で、神秘的であつた魔法は崇め奉られていた。

少なくとも時間が流れた。

ある時。

ある女は竜の供物として、酒と共に贈られた。

ある男は占いの結果、人柱の責を担った。

ある赤目の双子は死を呼ぶとして、生まれて半刻とせずに殺されることとなった。

いつものように、魔を敬い畏れていた。

だが。

とある男が竜を殺し、女は助かった。

怒り狂った人柱の男は、占った巫女を蹴り殺した。

赤子の母が子供を連れて逃げ、双子も母親も寿命を以って死亡した。

小さな疑問が浮かび上がる。

固い結び目が僅かに緩んでしまうような、そんな疑問が人々に考えさせる。

今までが。

子を、親を、恋人を、家族を捧げてきた、これまでが、段々と不確かなものとなっていく。

遠くの地ではまた竜が倒されたらしい。

もしかすると。
もしかすると、竜も巫女も呪いも大したものではないかもしれない。
いと。

少しずつ、少しずつ、人々の中にそんな思いが浸透していく。

感情は爆発した。

＊＊

僕は自分の中にある知識を探っていた。

声についてはまだ何も分かっていない。

同じことを繰り返すばかりで、しかもその度に眠気が襲ってくる。
置いておくことにした。

緑の液体からも抜け出せていない。

ケースを叩いてみたが、液体の中に居る以上威力が乗らないのは
当たり前前で、鈍い音が響いてくるだけだった。

手も赤くなって、ちよつと痛かった。

そういえば、この身体は十歳くらいの少年だった。

前進出来たかもしれないけど、今のところ役に立ちそうにないの
で、これも置いておくことにしよう。

どうしよう。

何か解決手段は無いものだろうか。
考えたところで、無いものは無い。

自分の名前だって思い出せないのに、あるわけないのである。

……は？

いや……でも……これって。

あった。

呼吸するような自然さで（今の僕の生命維持が呼吸によるかは分からないが）、僕の脳裏にはある単語が浮かび上がっていた。

『魔法』だ。

そこからさっきの魔法の秘匿理由に続く。

数は力。

魔法を持った人間も、怪物も確かに強い。

言葉通りの一騎当千にもなれるだろう。

だが、魔法で食糧を生み出せるわけでもないし、金を作れるわけでもない。

何より寝ないわけではない。

やり方はいくらでもある。

男は酒を喰らって酔いつぶれたところを狙い竜を殺した。

巫女は人柱の男の演技に騙された。

母親は、少なくとも双子が生まれるまでは従順だった。

まさか『殺されるなんて思いもしなかった』のだ。

信徒であり敬虔であり、なによりも脆弱な雑魚程度に殺されるわけがないと思っていた。

生贄も占いも人柱も、仕方なく受け入れていただけで、決して喜

んでいたのではなく、むしろ憎んでさえいたことに、気付きもなかった。

当然、抵抗は出た。

その中には飢餓や疫病もあり、少くない犠牲が出た。

だが、人々は勝利した。

そして、魔法に代わる、誰でも使える『技術』と『兵器』を手に入れた。

「——故に、魔法は秘匿される、か」

魔法は負けたのだ。

神秘だからとか、選ばれた者が持つべきだとかの大した理由ではなく、時代に淘汰され駆逐され、間引かれた。

だから隠す。

体系を変え、術式を代え、道具を換え、陣を替え、全く別の姿となつて。

血を薄めても使える、かつて敗れたものと同じ『技術』になった。

＊＊

「でも魔法使えないんだよね」

現代魔法には『発動体』と呼ばれるものが必要だ。

杖が最たる例であり、指輪や剣、弓なんてものもある。

これが無ければ魔法は基本的に使えない。

今の僕は裸だ。

服を着て液体の中に入ったりはしない。

裸だから、当然何も身に着けていない。

発動体なんか持っていないから、魔法を使えない。

結局出られない。

「詰んだ」

殴る蹴るじゃケースを壊せないし、もしかたら使えるかもしれない
と思った魔法は大前提を満たしていなかった。

何も出来そうになかった。

幸いにも、定期的に流動食のような何かがケースから流れてくる
ので、餓死することは多分ない。

取りあえず、魔法に関しての知識をもう少し探ってみようと思う。
諦めるには未だ早いはずだ。
きつと。

＊＊

現代魔法の属性は、地・水・火・風・光・闇に分けられる。

その内のいくつかは、補助的な役割を持った類似属性があり、

地には木。

水には氷。

風には雷。

闇には影。

他にも重力や念動力、占いや妖精使役の無属性、種族特性で決ま
る固有能力などもあり、かなり多岐に渡っている。

ちなみに初級魔法には、
地よ起きろ。
木よ芽吹け。
水よ満たせ。
氷よ凍てつけ。
風よ吹け。
雷よ疾れ。
闇よ鎖せ。
影よ刺せ。
光よ照らせ。
があり、適正がなければ、仮に初級だとしても使いこなすことは
おろか、発動させることさえ難しい。

だが、唯一例外が存在する。

火属性「火よ灯れ」だ。
アール・デスカット

＊＊

「誰でも使える魔法、か」

言うなら超初級魔法。

指先ほどの大きさではあるが、火属性の中でもこの魔法だけは適
正を無視することが出来る。

「……」

もしかしたら、と思う。

大前提を満たしていないのだから有り得ないだろうが、悪戯心の
ような閃きに、頬が緩む。

くく、と僕は笑って、

「プラクテ・ビキ・ナル。火よ灯れ」

と唱えた。

何も起きない。

だよ、と少し諦観を込めて納得した次の瞬間。

「は？」

灼熱が僕を襲った。

＊＊

僕を覆っていた液体が一気に沸騰したのだ。

熱いだなんてもんじゃなかった。

今まであまり動けなかったのが嘘みたいに僕は沸騰する液体の中
を暴れまわった。

弾性があり長さにも余裕があったチューブは未だ喉を通っている。
苦しい。

これを抜きたい。

熱は痛みになりかけていた。

温度が沸点へ到達した液体は気体になる。

これは常識だ。

問題はここが密閉された空間であることだ。

液体よりも気体の方が体積が遙かに大きい。

ケース一杯に入っていた液体が一斉に気体になる。

つまり示すのは――

ピシピシとケースにヒビが入っていく。

増えた体積がケースの許容量――強度を超えたのだ。

僕はヒビの入った箇所を痛みに悶えながら思いっきり殴った。

バキッと、拳がケースの外に飛び出した。

今度は引き抜く。

そこに沸騰している液体が押し寄せる。

圧力に負けてケースは風穴を空けた。

「……う、嘘だ」

僕はケースの外に出ることが出来た。

悩んでいた自分が滑稽に思えるくらい簡単だったからか、釈然としない気持ちのまま、僕は馬鹿みたいに呆けてしまった。

＊＊

結論から言えば、外には何も無かった。

あれからチューブを抜いて息を整え、初めて見る外がどんなものかと期待に胸を膨らませたが、誰もいないし、何もない。

自分のいたケースがあるので何もないわけではないのだが、ここで何をしていたのか、自分は何をされていたのか、せめてそれが分かる資料が欲しかった。

ケースの近くには別の機械があったが、口に差し込まれていたチューブに繋がっていて、たぶん栄養を送るものだと思うわれる。

中身はドロドロのナニカだった。

二度と見る気がしなかった。

味だって知りたくない

服は置いてあつて助かったが、一応服と呼べる、程度の代物で所々ほつれていたり穴が空いていた。

ていうか単なる長いだけの布だった。

もしかしたら床に敷かれていたものかもしれないが、それでも背に腹は代えられないので妥協する。

裸なんて真つ平ゴメンだ。

これで全部だ。

ケース、機械、服。

こんなところだ。

ケースと機械の動力が気になったが、それに関しては知識にもなく、見た目では分からなかった。

誰もいないのは地味に辛かった。

布の古さから見ても最後にここに人が来たのはかなり前のようだ。何故稼働していたのか疑問は残るが、これだけ何もないとこの施設（？）は廃棄されたのかもしれない。

壁は岩肌でむき出しの洞窟のような場所だから、施設と呼んていかも迷うところだが。

誰もいないとなると僕は一人で生きるしかないらしい。

外——ケースの外という意味ではなく——この施設の、本当の意

味での外に出ようと思うが、この施設はどうしようか。
何も資料がないなら邪魔なだけだろう。
物理的に廃棄出来るならしてみよう。

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ」

人差し指を前に向けて唱えてみた。
直径二十センチくらいの火球が放たれて、前方のケースと機械に
ぶち当たり爆散した。
強い向い風が髪を撫でた。

……あれ？ 火よ“灯れ”？

ゴシゴシと目を擦るが目の前の光景に変化はない。

ケースと機械は粉々になっていて溶けている部分もある。

物理的に廃棄するという目的は達成されたが、起きた現象に納得
がいかない。

発動体が無くとも魔法が使えたり、本来とは違う形で発動してい
る。

知識が間違っていたのか？

そうだとするとこれから先かなり不安である。

僕の持ち得る唯一の財産である知識が間違っていると、何が正し
いのか分からない。

それに超初級呪文らしい（知識以外にも詠唱の短さから判断）、
「火よ灯れ」がこの威力だとすると他の呪文を使うのが正直怖い。
魔法使いに会ったら逃げることを優先したい。

簡単に殺されてしまいそうだ。

ふと思ったのだが、闇魔法と影魔法は初級のくせに詠唱が妙に恐
ろしくはないだろうか。

それとも、暴発というやつか？

その方がまだ安心できる。

コントロール出来るようになればいいわけだし、知識が正しいと
いうことになる。

秘匿理由云々がこれで間違っていたら、なんていうか赤っ恥だ。

そういえばケースの中で使ったときはどうだったんだろうか。

火球の速度は速くなかったから熱量を液体に吸収されたのか。

それともあの時は成功したのか？

ビギナーズラック？

まさか出ると思わなかったから観察なんか全然してないし、出て
からは熱すぎてそんなことに頭が回らなかった。

「ん？」

思い返してみると、沸騰した液体の中にいたのだ。

何故、体は傷ついていなかったんだろう。

疑問がまた増えてしまった。

目的は達成したので、外に出てみると、そこは森だった。

やっぱり施設？は洞窟にあったようだ。

雨が降っていて、緑の液体を洗い流せたから気持ち良かった。

服もずぶ濡れになってしまったが、いざとなったら火を使えばな
んとかなるだろう。

足下を見ると、大きな水たまりがあった。

今は雨が降っているが夜ではないから、少し明るい。

覗き込むと自分の姿が映った。

「これが、僕か」

施設には鏡もなかったから、初めて見ることになる。

「思ったよりも……たぶんだけど、整ってるのかな？ でもちよつと無表情だな。『笑ってる』つもりなんだけど……顔の筋肉が発達してないのか？ これから頑張ればいいか。しかし、この歳にしては珍しい髪の色だ」

水たまりに映ったのは、

十歳くらいの、少し表情の乏しい、総白髪の少年だった。

少年のプロローグ（後書き）

「プラクテビギナル」の区切りは

「プラクテ・ビギ・ナル」？

「プラ・クテ・ビギナル」？

前者はネギや夕映。後者はラカンが言っていました。

火球の直径を三十から二十へ。

1話―爆弾をかかえて（前書き）

書くの遅いなあ。

何で友人は書くのがあんなに速いんだろう。
慣れか。

今回、初っ端から少し暗いです。

1話―爆弾をかかえて

風が吹いていた。

木々がその風に揺られて、静寂に満ちていた森が蠢いた。

梟が時折、ホーと鳴くと、狐がケンと返し、森は打って変わって喧騒に包まれていく。

「はあはあ」

いや、違った。

森が喧騒に包まれたのは、風のせいではなかった。

「なにが、研究職だ。くそふざけた怪物じゃねえか」

落ち葉を踏みしめる、ざくざくという音が静けさを散らかしていた。

その人物は左腕を肩口からばっさり無くして、包帯で止血している男性だ。

変色した血は包帯の白色の殆どを侵して、元々赤黒かったのではないかと思えるほどに染まっていた。

顔には焦りと苛立ちが浮かんでいた。

土気色とまでは行かずとも、赤味ではなく青味が指していて、失った血の量がうかがえる。

男は逃げていた。

何から、というのはもはや男にさえ分からなかった。

あの化け物なのか、それとも何れ来るだろう豚共の追っ手なのか。疲れが足を止めようとする。

痛みが腕を動かすと言う。

脳が休めと囁いてくる。

それでも男は一步踏み出した。
理由などない。

生きていることは詰まらないし、死んで悲しむ者も思いつかない。
胸を張れる人生だったわけではなく、過去に戻れたらと願ったことは数え切れない。

酒の席でかつて口にした言葉を思い出す。

たぶん俺は、惨めったらしく、最高に無残に死ぬんだろうよ。

悪酔いしていた自覚はある。

俺は自虐的に呟いていて、相手はこっちの事情を知っている相手だった。

確かそいつは……絡んでくる俺に、苦笑いしながら何も答えず、冷えた水の入ったグラスを渡す、そんな気の利いた奴だった。

何であいつの顔が浮かんだのかは分からない。

もっと起伏に富んだ身体つきで、そばかすも無くて、髪だつてくすんでいない、いい女はたくさん見てきたはずなのに。

ただ、どうしてあの言葉が浮かんだのかは分かった。

後悔ばかりで、未練たらたらで、どうしようもなく、死にたくないのだ。

何にも残せやしないと諦めきつてくせに、後ろから刺される生き方を選んだくせに、死に際は誰かに看取られて、満足しながら逝きたいのだ。

だから、こんな森で終わるわけにはいかない——！

「……くそがつ。無駄に良い鼻しやがつて」

だが、そう簡単に想いは届かない。
男の身体には擦過と刺し傷が多い。
微々たる量であっても、血を流し、その匂いは獣たちを呼んでいる。

そう、動物たちが騒ぎだしたのは風のせいではなかった。
獲物が来た、と。

匂いを嗅いだ動物たちは歓喜に、鳴き声を上げたのだ。

男が決して暑さからではない汗を拭うと、

シン――

まるで合図をしたかのように、喧騒が静まり返った。

男は暗闇に慣れてきた眼で辺りを見回すが、何も見えなかった。
音の無い世界。

耳元で響いているかのような心臓の音以外、何も聞こえない。

――来るか。

それでも確かに居るのを、男は眼でもなく耳でもなく、肌で感じ取っていた。

人間にはない、獣特有の視線がこちらに突き刺さっている。

男は刃の欠けたナイフを逆手に持とうとして、一瞬震えた右腕に舌打ちしそうになる。

体力はなく、反応も鈍い。

先手を取れる状況ではなかった。

男は重心を落し、身構える。

「舐めるなよ」

ガサッと茂みが揺れ、三つの小さな影が飛び出した。

「獣ごときがあ！」

男の進行方向とは逆の場所では、また別の喧騒が響いていた。祭りだろうか。

煌々と照らす月とは別に、篝火の赤が色を与えていた。かがりび

村の中央に位置する開けた広場の、同じく中央にある火を囲うようにして、百弱の人数が大きな声を出しながら、騒いでいる。

旅の楽団でもいるのだろう。

笛の音や囃す声に合わせて、派手な衣装を着た踊り子が身体を揺らしていた。

風が僅かばかり吹いていて、篝火の炎も揺れる。

踊り子から伸びる影が一瞬前とは違う長さになり、彼女の肌を晒した独特の衣装も相まって、

「中ナかに、幻想れきじゃないか」

呂律の怪しさを出しているのは、この村の長だった。

先代が早くに亡くなったため、若くしてその座に納まったのは、そう昔のことではないのだが、彼は村人たちの期待によく応えていた。

「まったく、飲み過ぎだよ父さん。姉さんもそう思うだろう」

「私としては発言の方が気になりますね」

若くして、といつても、既に二人の子供がいる。

上が女で下は男。

両方とも成人しており、娘の方はもう嫁いでいた。

息子も、長の立場に何れ着くからか、人気があるが、本人にその気はまだないようだった。

それでも最近、このままではいけないと悩んできたのか、父に相談していた。

「は、発言つてどういう意味だい姉さん」

やや焦ったように言う弟に、姉は嘆息する。

やれやれ、といった感じで首を振った。

「あなたも男なら分かるでしょうに。踊り子の仕事は踊って楽しませる以外にもあるでしょう？ そんなことだから未だに誰とも出来ないのです」

「で、出来——お、大きなお世話だよっ」

顔を赤らめる弟を見ながら、姉である彼女——クリシア・ノーベルトは、また溜め息をつきそうになる。

何と言うか、この弟は可愛いのだ。

姉としての愛情もあるが、そんなこととは別に、年齢の割に仕種や顔立ちが妙に幼かった。

男らしさのカケラもない。

畑仕事を手伝っている以上、肉体的には絞られているが、服の上からは全く分からない。

数日前ふと思い立ったので、友人たちと共に女物の服を（強制的に）着させてみたら、幾人かが悔しげに走り去っていき、幾人かは

眼が危なかった。

あれは捕食者の眼だった。

母さんも「あらあら、可愛いわねえ」と、息子に対する評価としては甚だ疑問であるが、微笑んでいた。

父さんも含めて他の男たちに着させたら——似合うのではなく気持悪いという意味で、笑いを誘っているだろう。

成人しているくせに、下の話題にも冗談で返せない辺りが空気が読めていないし、初^{つぎ}すぎる。

声だつて男の野太さや低さはなく、細く高い。

そもそも顔の形が子供の頃と同じように丸っこいのだ。

「……ん？」

ぐい、と弟に顔を近づけた。

弟は驚いて遠ざかろうとするが、ガシッと両手で捕らえて逃がさない。

「な、なにするんだよ」

「黙ってなさい」

鼻の下に指を這わせた。

弟は何を調べられているか理解したようで暴れるが、一睨みすると大人しくなった。

続けて顎にも指を当てる。

「あなた、もしかして……」

今の今までどうして気付かなかったのだろう。

自分にはないものだから関心が薄かったのかもしれない。

うー、と弟は震えている。
小鹿のようだ。

「……そうだよ、ヒゲなんて生えてないよっ」

今度こそ、私は溜め息をついてしまった。

私が見てきた中では、成人してから外見が劇的に変化した者は少ない。

老人になれば別だろうが、それは求めていない。
てっとり早く分かりやすい男らしさを出すのがヒゲだったのだが、
どうにも望みは薄そうである。

見た目が変われば中身だって変わる。

時間による精神の成熟もそうだが、年相応に扱われることで成長
していくというのに。

十年経つても（性格も）このままな気がしてきた。

実際に悩みどころなのだ。

女相手ならまだいい。

他の男にないそこに惹かれる女もいるだろう。
眼が怪しい光を発していた友人たちとか。

男たちが問題なのだ。

疎外されているわけではない。

むしろ好かれている。

しかし、一度見たことがあるが、それは子供をあやしているに近
かった。

村長になる以上、威厳という物が少なからず必要になってくるの
である。

内々で決めるような会議の場合はまだいい。

いやそれでも良くはないのだが、あいつは俺たちがいないと駄目

だからな、と頑張る奴が出てくるだろう。

村で出来た作物や木を売る時の交渉が危ういのだ。

外交は代々長の仕事である。

商人や他の村の長、領主と取り次ぐ役人との対話の時、殆どの場合相手は男だ。

弟の性格は甘く、意志薄弱だ。

舐められては交渉がまともなものにならない。

もちろん、相手もただ外見だけで決めるような真似はしないだろう。

付き合いが長く、またこれからもある以上、そこまで酷いことにはならないかもしれない。

だが、樂觀視も出来ない。

初めは少しだった差が、いつの間にか大きくなっていった、なんて笑い話にもならない。

まあ、とはいえ。

「——今、考えることでもないか」
「へ？」

久しぶりに祭りをしているのだ。

変に弟の気分を害するのは、それこそ空気が読めていない。

飲みなれない葡萄酒を杯に入れ仰いだ。

苦味を伴った冷たさが、喉を通る。

同時に鼻腔を抜けていく香りを味わい、ごくんと嚥下した。

「あなたも飲みなさい」

危機から逃れたことを察したのか、弟は嬉しそうに自分の杯の中身を飲み干した。

いい飲みっぷりである。

「……苦い」

——これさえ無ければ。

いいんだ今は祭りだから。

いいはずだ、たぶんきつとおそらく。

「羊の乳と変えましょう」

「提案じゃなくて断定されたっ？！……大丈夫だよ、この味に慣れておきたいんだから」

「心掛けは立派ですが、倒れては駄目ですよ。……ああほら、あなた目当てが二人来ました。相手してあげなさい」

友人たちがやってきた。

友人と言っても同じ年ではなく、むしろ弟よりも二、三下になる。狭い村なので、余程年が離れていなければ大抵友人扱いだ。

「飲んでるかー！ダーン」

「ん、肉持ってきた」

弟——ダンケン・マクシミリアにしな垂れかかる友人1と、木皿に山のように肉を積んできた友人2。

「ほ、ほら飲んでるよミナ。あつ、これ好きなんだ。ありがとうアイン」

先程酒が苦手なことを晒した弟は、黙っててよという意思を視線に込め、それ以前に背中当たっているだろう感触に、どもりながらも手にした杯を掲げた。

そのあと差し出されている山の天辺から、肉汁で光る骨付きを選ぶ。

「そんなこと言っただって二杯目はミルクだろー？ 変わんねーなー昔っから」

「知ってる。だから持ってきた」

ミナは年齢よりも上に見られることが多く、アインはその逆だ。にも関わらず、アインの方が年上なのだから発育というのはよく分からない。

「うっ。でも今回は頑張るつもりなんだよ」
「——ほう」

弟が二杯目の葡萄酒を注いだ時、ミナの眼が邪な輝きよこしまを持った。前髪で殆ど隠れているアインの眼も、付き合いの長い者なら分かる程度に変化する。

伺うようにアインがこちらを見た。

いいですか、と。

私は、大きく頷いた。

大人にしてこい、と。

「よーし、よく言った！ それなら浴びるように飲むぞ！」

「……樽持ってきた」

何処にそんな力があるのか、そしていつの間にか、小柄なアインはドンッと酒樽を置いた。

ぐつと親指を立てるミナ。

視線を交わす友人二人は、どこか誇らしげで、良い仕事だ、勿論、と言葉もなく通じ合っていた。

「ええ、樽？！ さ、さすがにそこまでは飲めないかなあー」

どこまでいくかは当事者次第だが、仮に二人と最後まで行っても、弟はきちんと責任を取るだろうし、村人だって昔から見ているのだ。認めてくれるだろう。

対外的には何か策でも考えておけばいいだろうし。

助けてくれと、今度は弟がこちらを見ていた。

だが、私は友人たちの味方だ。

大切な弟だが、今回ばかりはちよつと無視しても仕方がないだろう。

私は残っている杯の中身を涸らす。

「ふうー、美味しい」

父と同じように、私もきつと酔っぱらってしまっている。

正しい判断が出来ない時は何もしないのも手だ。

だって祭りなのだ、仕方がない。

＊＊

祭りとは楽しいものだ。

しかも今回は久しぶりの豊作で数年ぶりになる。

話の種も酒の肴も尽きはしない。

飲んで食って歌って踊る。

意中の相手を誘ってもいいだろう。

それは楽しい楽しい宴だった。

壊すものなど居やしない。

この村の誰だって、そんなことは望んでいない。

変化を運んでくるのは、いつだって異邦人だ。

夜。

帳の中、明かりが一つあった。

誘われたのは一人の少女。

果たして彼女は蝶か蛾か、それは誰にも分からない。

村人にも、そして少女自身にも。

物語の開幕まであと少し。

始まりの少女、彼女の名前は――

「エヴァンジェリン、そう名乗ったのだな」

「はい父さん」

「ご苦労だった。下がっていい」

娘の足音が遠ざかっていくのを確認すると、俺は盛大にため息をついた。

二日酔いに痛む頭を使うには、少し厳しい内容である。

昨晚発見された少女は一度意識を取り戻した。

直ぐにまた眠ってしまったそうだが、その時に名前を聞き出すことが出来た。

エヴァンジェリン。

聞いたことがある。

とはいえ、この村で知っているのは自分だけだろう。

マクダウエルの寵児。

絹のような金髪を持った美しい少女という噂だ。

あまり外には出ず、社交の場でもほとんど現れなかったようだが、それでも噂になるのは相応のものだということだ。

「いや、さすがに早計か」

多くない名前だが、唯一無二ではない。

少女は金髪ではあったが、名前と髪の色だけで決めつけるには材料が足りない。

だが、もしも彼女がマクダウエルなら――

「間違いなく、これは爆弾だ」

貴族の、見目麗しい年ごろの娘がどうしてこんな森にいたのか。対応を誤れば死にかねない劇薬が懐に入り込んだことになる。

「手は打たなければなるまい」

考える必要があつた。

何が最善か、これからどうするかを。

＊＊

「プラクテ・ビギ・ナル。戦神の角笛よ、雄々しく強く高らかに闘を鳴らせ。戦いの歌」

僕は自分の手は開閉する。

別段、変化はない。

外見上の変化があつては、秘匿の意味がないからこんなものだろう。

近くの樹を殴りつけた。

鈍い音がして、衝撃が響いた。

「つつつ……！」

——僕の拳に。

「あー……」

僕はきよろきよろ辺りを見回した。

魔法が秘匿されている以上、見られては困るので、当然誰もいないのだが、なんとなく気恥ずかしい。

でもまあ、とりあえずの現状判断は出来たわけだ。

初級の基本魔法は、地・水・闇の順で適正があるようだった。

地や水は質量や体積で、闇は強度と効果範囲で、ある程度具合を見る事が出来るらしいが、それよりもっと単純に、使いやすい——しっくりとくるのだ。

魔力が通っている感じがする。

補助系統は影以外は全滅だった（影の適正は闇と同じくらいだ）。
無属性も同様。

発動の兆しささえ見えない。

木と氷は使えなかった。

基本が使えれば補助も使えると思っていたのだが、勘違いだったようだ。

最悪なのは、肉体強化、そして障壁が一切使えなかったことだろう。

比較の対象がないのではつきりとしなが、もしかしたら僕は才能がないのかもしれない。

肉体強化が使えれば生活がいつきに楽になるし、逃げることに事も事欠かない。

障壁は言わずもがなだ。

自分の身が守れるし、なにより不意打ちに強い。
寝ている時にだって、絶対の信頼は置けなくても安心出来る。

魔法の秘匿理由を知っている以上、どうしても欲しかったのだが、使えないのなら仕方がないだろう。

単に練習不足の可能性もある。

ちなみに、地属性「地よ起きろ」を使って洞窟の入り口は塞いだ。その名の通り、地面が隆起する魔法で、咄嗟の時は良い壁になってくれるだろう。

僕の体の倍以上の高さがある天井まで、一呼吸と経たずにせり上がっていくさまは、中々に壮観で、それと同時にやっぱり魔法は怖いという印象が強くなった。

知識の中にある魔法は、効果についてもきちんと載っていた（知っていたが正しいか？）のだが、「火よ灯れ」が蝋燭程度の火だなんて載っている辺り、過小評価がすぎる。

「地よ起きろ」にしても膝丈より少し下の高さまでしかなく、強度も大してない、となっているのだ。

実際に「地よ起きろ」で出来た土壁は「火よ灯れ」の火球でも少し削れただけで、まあ今の天候が雨であることや適正の有無というのもあるかもしれないが、それを差し引いたって固まる前の粘土と同じ強度、なんてのはありえない。

この知識は、恐らく魔術書からそのまま引用したのではないかと僕は考えていた。

実際に魔法を使う魔女や魔法使いは、師匠から教わる際に本当の威力を聞いており、魔術書に書かれている低すぎる効果は、もしも部外者に見られてしまった時の方便なのではないだろうか。

推測は他にも立つが、何にしたって本当の効果と威力が知識に載っていて欲しかった。

『声』の意味——かつて自分は。。。。だった、の空白にあたる部分を探ることが当面の目標だ。

この身体は誰なのか、どうして僕はこうなってしまったのか、などの知りたいことは多くあるが、まずは村が出来るなら町に行くつもりである。

食糧を得るためだ。

そう思うと水魔法が使えたのは僥倖だろう。

近くの村や町までどれだけあるか分からない以上、飲み水の確保が出来たのは嬉しい。

唱える度に辺りが水浸しになるが、そこは眼をつぶる。

今さらだが、ドロドロした食べ物つばい何かを少し持つてくればよかったかもしれない。

ここは森なのだから獣くらいは居るかもしれないが、攻撃手段に速度のあるものがなかった。

火球は遅い。

地と水は攻撃用ではない。

闇は地面が黒くなったかと思うと、箱のようなものが出現し閉じ込める魔法らしいが、まだ箱を出す場所の指定が出来ない上に、栗

鼠がやっと入るくらいの小ささなので無理だ。

影は薄い槍みたいなのが、自分の影から出てくる魔法だが、効果範囲が狭く強度も脆かった。

応用したり工夫すればなんとかなるかもしれないが、現実ではない。

魔法に慣れる必要があるだろうが、それ以前に飢えて死にたくない。

やはり人の居るところへ行くべきだろう。

もしかしたら僕について知っている人がいるかもしれないし、何か情報を手に入れられる可能性もある。

「行くか」

最初の一步だ。

その感触を足の裏で噛みしめる。

これから何があるのか、誰に会うのか、どんなことを経験するのか、そんなことは分からないけれど、ただまあ悪い気分ではなかった。

＊＊

「……誰だろうこの人」

歩き始めて十数分、行き倒れを発見した。

というよりこれは死体だろう。

左手がないし、血だらけだ。

つついてみようか、と思い——蹴飛ばした。

何があるか分からないので、手は自由な方がいい。

鞭打つような行為である。

「……うう」

「あつ、生きてた」

どうやら生きているようだ。

こんな姿にまでなつて、人間て凄いと僕は感心した。

「……だ、誰だ？」

かなり苦しそうに声を出していた。

どうしようか、と悩んだが、助けることが出来れば感謝されるだろうし、この人が住んでいる町か村にパイプが出来るかもしれない。それは良い展開だ。

「うーん、ただの通りすがりかな。おじさんにとっては救世主かもよ？」

僕はウィリアム・アーサーなるおっさんを手に入れた。

彼は気付かない。

一度は損傷の激しい死体だと判断したに関わらず、全く動揺しなかった自分に気付かない。

明らかに「異常」と言える自分の心に、彼はまだ気づいていなかった。

1話―爆弾をかかえて（後書き）

感想・誤字指摘等、お待ちしております。

*嫁いでいると書いたのに、姉と弟の家名が同じだったので修正しました。

*マクダウエルの城が近いという情報と冒頭にあったフランスという情報を削除しました。

2話―大切であるということ（前書き）

書き忘れていましたが、雨は止んでいます。

2話―大切であるということ

――直後。

「うん、順調だ。おっさんが言うにはこっちに町があるようだし」
僕はおっさんを背負って歩きだした。

体格の違いから、おっさんの足を引きずってしまっているが、おっさんも命には代えられないだろう。
しかし、重いなおっさん。

――30分後

「行けども行けども森ばかり。嫌になる」
おっさんは僕の背中で眠っている。
助かったと安心したのかもしれない。
実際には気絶していた。

――60分後

「……あれ、体力あるな僕。汗くらいかくだろう普通」
思えば、一時間近くおっさんを背負ったまま歩きっぱなしである。
それなのに汗一つかいていないし、疲れが溜まっているわけでもない。

案外、肉体強化の魔法を使えなくても何とかなるんじゃないか？

――70分後

「ぜえー、はあー。ぜえー、はあー」
一気に疲れてきた。

汗を滝のように流している。
テンションが上がっていて、肉体の疲労に気づかなかったのかも
しれない。

―― 80分後

「……………」

―― 100分後

「……やった、やったよおっさん」

街道に出た。

直ぐ右を見ると、町があつた。

僕は何故か近づいてくる地面に、抵抗出来ず、身を任せた。

視界が暗転する。

雨が降った後のぬかるんだ地面に、前のめりに倒れる。
呼吸困難という意味では結構危ない状況だった。

＊＊

運が良かったとしか言いようがない。

「え？」

「聞こえなかったかな、この村は君を受け入れよう」

エヴァンジェリンが受け入れられたのは昨日が祭だったから。
ただそれだけの理由だ。

エヴァンジェリンを村に受け入れられたのは事後承諾に近い。
行く宛てがないと言った彼女に対して、追い出すのは忍びない
という意見が大半だった。

これは前日が祭りであつたことが関係している。

もし平時に訪れても、村長と数人の目に触れるだけで門前払いだっただろう。

得体の知れない人間だ。

村という大くない共同体にとって、人の数が増えることは好ましいことだが、それ以上にトラブルに敏感で排他的である。

どんな事情を持っている人間も全て受け入れるというわけにはいかない。

それが長の立場として、取らざるをえない、取らなければならない選択だ。

だが、重ねて言うが彼女は運が良かった。

祭りという雰囲気には水を差さないよう、一日村に置かれることになる。

村、そして祭り。

昨晩の内に、噂は病原菌のように瞬く間に広がって、村人全員が彼女のことを知った。

この、全員が知ったというのが重要だ。

彼ら彼女らは今日も仕事に精を出していて、村の政治には関わらない。

関わるのは一部の語り部と長だけだ。

故に、彼らはマクダウェルが持つ危険さを十全に理解することが出来なかった。

今まで一度も触れることのなかった分野だ。

解れ、と言う方が無理がある。

ここで全員が知っている、というのが活きる。

他の村人達の目には幼い美少女（関心を得ることが出来て、同情を引きやすい）を追い出そうとしか映らないからだ。

仕事を与えて働かないならまだしも、すぐに追い出す必要はないだろう、と。

新しい血も必要であるし、見た目だって申し分ない。

その手の趣味の人が居たら速効でお持ち帰りしたくなるレベルなのだ。

もちろん本気で否定すればエヴァンジェリンは出ていかざるをえなかっただろう。

だが、彼女はマクダウエルの姓だと名乗っておらず（事態を把握していれば名乗るわけがないだろうが）、事情についても話していない。

確たる証拠がない以上、尊敬と信頼が無ければ成り立たない立場としてはこれらの意見を無視することが出来なかった。

「——だから、私は君を置くことにした。分かったかい」

「……全部は分からないけど——じゃなくて、分かりませんが、わたしが言うことは一つです。感謝いたします、長」

ぺこり、と腰を折る少女、いやエヴァンジェリンか、に長——ギルバート・マクシミリアは自分の判断が正しかったのかどうか逡巡する。

頭は良さそうだ。

言葉の端に年相応のものが出ているが、それでも同年代と比べれば判断力はあるだろう。

まあ、俺の知っているこの年の少女なんてのは、家や畑の手伝いばかりで教養や礼儀作法なんて習ってないがな。

だが、噂通りに相応だ。

容姿に限ったことではない。

そも、娘に聞いた話では体のあちこちに汚れや服の解ほれがあつたらしいが、その汚れに対応する怪我が一つもなかったと言うのだ。

この村へ至る道は当然獣道ではなく、ある程度開けた馬車の通れる道もあるが、正規の道を歩いてきたにしてはあまりに汚れすぎている。

エヴァンジェリンが正規の道に来る以前に体を汚してしまったんだろっ、と考えているが、本当にそれだけだろっか疑ってしまう。事、エヴァンジェリンに関しては疑い過ぎるくらいで丁度いい。幸いにも村人たちはどちらかと言えば好意的に感じているようだから、自分はこのスタンスで行くつもりだった。多角的に見た方が見極めやすいだろう。

何があつたのか、知る術はないが、聞く術はある。信用を得ることだ。

話してもいい、この人なら大丈夫ではないか、そう思わせたなら上出来だ。

そのあとで追い出すかどうかを考えればいい。

エヴァンジェリンには悪いが、俺には妻がいて子がいて昔からの友人がいて、そして村の長だ。

村を存続させることが親から仕事を受け継いだ俺の使命であり、その中に少女を匿うことは含まれていない。

妻とエヴァンジェリンでは妻を取る。

子とエヴァンジェリンでは子を取る。

友とエヴァンジェリンでは友を取る。

この村で産まれたばかりの者であっても、確実にその赤ん坊を取る。

命の価値が違う。

だが取りあえずは信用を得なければならない。

心の垣根を外し、踏み込んでもいい場所を増やさなければならぬ。

「私、いや、俺の名前はギルバートだ。ほとんどがそう呼んでいる。君もそう呼んでくれないか。気楽だからね」

いきなり一人称を変えた俺に、エヴァンジェリンはきょとんと呆けたあと、くすくすと笑った。

「……では、ギルバートさん。これからよろしくお願いします。わたしのことはエヴァって呼んでほしいな」

まずは自己紹介から始めようか。

＊＊

「この村で生活するのだから、当然仕事はしてもらおうよ」

名前を捨てよう。

ギルバートさんの自己紹介が終わってから、わたしはそう決めた。

何故ここにいいのか。

わたしはギルバートさんに言っていない。

ギルバートさんも詳しく聞いては来なかった。

いつか話してくれると思っているのかもしれないし、別に話さなくてもいいと思っているかもしれない。

どちらにしても、はぐらかすか、嘘しか言えないのだから、その気遣いはとても嬉しかった。

いつかわたしはこの村から去ることになる。

いや、この村での最後は「去る」ではなくどちらかと言えば「追
い出される」が近いだろう。

それがいつになるかは分からない。

実感はないけれど、わたしは不老。

五年居ることが出来たら上出来だ。

幸いにも、と言っていいのかは迷うところだが、この身はただの
吸血鬼ではなく、真祖ハイ・デイライト・ウォーカーだ。

制限されるが太陽の下でも活動出来ることは大きい。

もしかしたら、五年以上いられるかもしれない。

そのためにはマクダウエルの名前は邪魔になる。

貴族の家名など悪目立ちするだけで、利になることが一つもない。

「はい、ギルバートさん。これからのことを教えてもらえますか？」

いつか来る。

だが、その日を早くするのも遅くするのも自分次第だ。

そのわずかな間、わたしはただのエヴァンジェリンとして、人と
して生きようと思う。

「収穫時期が過ぎたとはいえ、仕事はたくさんある。まずは――」

夢が覚める、その時まで。

＊＊

「アンネ！」

叩きつけるようにして扉を開けたのは店の常連だった。
お金を落してくれるのはありがたいが、そんな身分だからって勝
手に厨房に入ってこないでほしいものだ。

「何よピータ、騒々しい」

私はスープの入った小皿に口を付ける直前だった。

いきなりの来訪に、そのまま少し固まってしまったが、気にせず
にスープを飲む。

塩辛い干し肉を戻したスープは、昔から食べている慣れ親しんだ
ものだった。

いつもと変わらない、母に教わった時と同じ味が舌を刺激する。

うん、今回もいい出来だ。

満足しつつ、息の荒い客に水を渡した。

「ほら、そんなんじゃ何を言ってるか分からないでしょ」

「あ、ああ、すまない。……んくっ……ぷはっ、相変わらずうまい
なここの水は——じゃなくてっ！」

いったい何を急いでいるんだろうかこいつは。

もうすぐ客が来る時間だというのに、こう騒がれては下拵えが出
来ないではないか。

そういえば、とアンネは一人の客を思い出した。

ヒゲはぼさぼさ、髪はごわごわ、顔には切り傷が付いているが、
それでも見た目はいい方だ。

あんた眼が腐つてると言われた過去が在ったり無かったりするか

もしれないが、私自身がいい方だと確信している以上、異論は聞く耳もたない。

しかもあれだけいい体格しているのに、誰かに抱きしめられるのが好きだなんて、たまらない。

もともと本人は一回も認めないし、何度も聞くほど野暮ではないから、そのことでもうからかったりはしていない。

だが、抱きしめられた時彼は明らかに力を抜いて安心しているのだ。

そして最高なのは、他の女にそれとなく聞いてみれば、なんと誰も彼のそんな一面を知らないではないか！

え、え？ と最初は戸惑ったものだが、やがて一つの結論に辿り着く。

つまり、つまりだ。

それは私だけが知っているということ。

自分は彼にとって、他とは違う『特別』ということだ。

喜ばずにはいられない。

小躍りしかけた私がその日マスターに早引きするよう言われたのはどうでもいいとして、ふはははは——おっと失礼……ついに春が来たのである。

私の見た目は大して良くはない。

髪はくすんだ赤で艶がなく、体つきは貧相で身長も低く、顔は童顔で子供に間違えられることある。

なんとセックスアピールに欠けているのだろうか。

そんな私に「いい人」が出来そうなのだ。

誰が逃さしておくべきか。

絶対に釣り上げてみせようと、月に誓おうと思ったがその日は曇りだったので、そこらへんの棒二本組み合わせて親指で押さえなが

ら、有名なあの人に誓っておいた。

ちなみに、彼女の職業は酒場の料理人・給仕と大人が楽しむアレである。

話上手・聞き上手であり性格も決して悪くないことから、彼女は一定の頻度で酒場の二階に行くくらいには人気があつたのだが、彼女の男の趣味が一般のそれから（控え目に言うつ）比較的外れていたので、彼女にとってそんな事実も男たちもアウトオブ眼中だった。彼女の中身をちゃんと見て好意を抱いた連中は、ぽつと出の男に何故か彼女がご執心なことに涙した。

片手では足りない数で、同僚兼友人は真実をしっかり理解していたのだが、氣に入つた男とそのような仲になるのは友人として嬉しいことなので黙っていた。

ともあれ、（ご執心のおん畜生もとい）ウィリアムが最近来ないことが、少しばかり心配だった。

彼の仕事は知っている。

それが危険であっても、止めることは出来ない。

彼が選り望んだ道であることも知っているから。

私には超常の力はなく、腕力もないから強引にはいけない。

言葉で止めることも出来ない。

悲しくはあるが、私の中の『特別』と彼の中の『特別』は決して等価ではないだろう。

だから、私は彼の中の『特別』を私のそれに近づけるのだ。

愚痴を言う彼にグラスを差出し、彼が注文された料理を頑張つて自分で作つて、素知らぬ顔で味を尋ねるのだ。

初めて美味しかったと言つてくれた夜は寝付けなかった。

見た目はともかく中身は歴とした大人なのに、と笑ってしまったが、それくらい嬉しかったのだ。

いつか『特別』の天秤が釣り合うその日に、一緒に生きよう、と想いを口にしてみせる。

出合いが物語みたいに劇的でなくとも、今は彼のことが大好きなのだから。

それなのに、二週間も来ていない。

それはいただけない。

大きな仕事があると言っていたが、これはダメだろう。

会う機会が無ければ、近づくものも近づかないし、何より寂しい。まったく、いつから女を待たせられる甲斐性を持つ――

「あいつが、ウィリアムが！ 血塗れになって見つかったんだよ！」

落とした皿は、カランと小気味よい音を立て、くるくると回った。

＊＊

暖かいものに包まれている。

柔らかな感触が身体の疲れを吸い取ってくれているようだった。気持ちいい。

それなのに外がうるさかった。

どたばたとしていて、落ち着けない。

「……んー、うるさい」

ぴたっと、騒々しさが消えた。

「え？」

まさか要望通りになるとは思わなかった。

僕はそーっと、眼を開ける。

ちよっただけ。

視界いっぱい誰かの顔が広がっていた。

「うわ——いてっ！」

驚いて後ずさると、壁に激突してしまったようで頭に衝撃が奔った。

「おーい！ 子供の方が起きたぞー！」

頭の上にクエスチョンマーク、眼尻に涙を浮かべていると後頭部に手を回された。

「暴れるなよ、怪我してないか見てやってるんだから」

慣れた手つきで髪の毛を探られる。

「ふん、大丈夫なようだな。腫れてもいない」

今度こそちゃんと眼を開く。

ウィリアムとかいうおっさんではなかった。

誰だこいつ。

「どうした坊主、まだ意識がはっきりしてないのか？ これ何本に見える」

ウィリアムではないおっさんが、親指で中指と小指を押さえながら人差し指と薬指を立てる。

普通に人差し指と中指を立てればいいのにと思ったが、もしかしたらウィリアムでないおっさんなりのユーモアかもしれない。

「二本」

素直に答えておく。

指の立て方に何の反応も示さなかった僕に、ウィリアムでないおっさんは不満がありそうがありそうだったが、それは別の来訪者によつて遮られた。

「起きたつて聞いたけどその子は大丈夫かい！」

だから誰だ。

女性は有無を言わず濡らした布で僕の体を拭き始める。

力が強く、結構痛い。

皮がめくれてるかもしれない。

拷問みたいな時間が過ぎると、女性は怪訝そうな顔をした。

まさかまだ物足りないんじゃないだろうな。

二度と御免である。

「あれ、思ったよりも汚れて無いねこの子」

「おいおい、馬鹿を言うな。泥だらけだったじゃないか」

「そりゃ泥はあったけどさ。それ以外の、垢とかが少ない気がする

んだよ」

「は？ お前、泥と一緒に拭いた布見てそこまで分かるっていうのか？」

「詳しくは分からないけど、経験とかでなんとなく分かるもんなんだって」

「そんなもんかね。だがよお、今回に關しちや勘違いだろ。あんな格好した子供が貴族さまみたいに風呂に入り慣れてるわけじゃねえだろ」

「……それもそうか。だからどうしたってわけでもないし、忘れておくれよ」

こつちを無視して話を進めないでほしい。

状況を整理しよう。

町に辿り着く手前で倒れた。

たぶん町の人に見つかった。

きつと助けられた。

おそらく彼らは好意を持ってくれている。

あやふやなのはしょうがないにしても、これが事実ならウィリアムというおっさんは嫌われてはなかったということになる。

おっさんが嫌われていたら、一緒にいた僕もこの扱いは受けなかっただろうし。

いや、子供だから見逃されたのか？

どちらにしても、一応は狙った展開になっているというわけだ。幸先はいいだろう。

「……あのー」

「なんだ小僧」

「どうしたのさ」

二人が話を中断する。

ウィリアムというおっさんがどうなったとか、ここはどこだとか訊きたいことたくさんある。

「服をください、お願いします」

だが何を訊くにしても裸では格好がつかない。

2話―大切であるということ（後書き）

アンネの一人称書いている時が一番楽しかった。

少女のプロローグからまだ24時間経っていないという罫。

内容的にはまだプロローグと言ってもいいからしょうがなくはあ
るけど。

次で主人公の名前が出る……はず。

あとウィリアムが血塗れなのに主人公厚待遇っておかしくね？と
思った人がいるかもしれませんが、次話で説明します。

感想、誤字報告、指摘等お待ちしています。

3話―僕思つ然るに「我」とは（前書き）

この小説は書き方を試行錯誤しているので、あまり統一性がありません。

考慮していただければ幸いです。

またサブタイトルは関連性があるようにしてはいますが、結構適当に付けています。

3話―僕思う然るに「我」とは

違和感に気づいたのはその少年に背負われた時だった。

酒に飲まれた身体ではあるが、俺は鍛えている方だという自負がある。

少年の身長も考慮すれば、体重差はそれなりにあるはずであり、それは少年の足取りを妨げてしかるべきであった。

だが少年は重いよおっさんと言うだけで、年相応と思われる体格で俺を運ぶ足取りには一切の遅れが見えなかったのだ。

少し経ちいつの間にか眠っていた俺は、衝撃に眼を覚ました。

少年は地面に倒れ伏していた。

はっとして辺りを見ると街道が直ぐ傍にあり、目的地であった町に近い場所であった。

俺はこの少年に感謝した。

俺が倒れていたのは確かに力尽きたのは感じ、そして今の体力では到底町に着けるはずもなく、諦めていたからだ。

そこに現れたのが少年だった。

救世主とほざく餓鬼が俺を看取るのかと悔しくもあり、だがそれと同時に独り逝くのではないことに嬉しくもあった。

結果として、少年は背格好からは考え付かない体力を発揮し、俺を町まで運ぶことに成功した。

少年が何故あのような場所にいたのか、服というよりも布の端材を纏っているのは何故なのか、少年は何故俺のような厄介事を持ちこんでくるだろう人間に関わったのか。

疑問は尽きないが、そんなことはどうでもよかった。

体力は心もとなく、俺はもうすぐ死ぬのだろう。

だがあと少しだ。

あと少しで町に着く。

あいつの顔を見れるかもしれない。

人知れず死んだ方が時間が風化する分、後腐れもないだろう。

目の前で死んで心的傷痕を残すなんてのは馬鹿のすることだ。

だからこれは俺の我儘。

俺はきつとあいつの心と記憶に、俺が生きていたという証を刻みたいのである。

体勢が危うかった少年をなんとか仰向けにして、俺は歩きだした。

体は重かった。

切り札の為の魔力は、あの化け物と対峙した時にかけていた肉体強化ですっからかんだ。

残っていたらとつくに治癒魔法を使っている。

残って――

「――は？」

この時の俺の顔を絵画にでも収めたら、一生笑いの種には困らなかったかもしれない。

それくらい俺は驚愕していた。

「……ネク、タル・エクタル・シェン、ラーマ」

左腕はない。

「汝が為、ユピテル王の恩寵あれ」

基礎の治癒呪文ではどう足掻いても元に戻らない傷。
だが無くなった腕を生やすは叶わなくとも、止血ならどうにか
する。

「治癒」

微かな光が俺の体を包んだ。
皮が再生し、外気に触れた肉を隠していく。

「ぐ、おおおおおお」

魔力をつぎ込む。

呼応して、再生速度が上がり、幾ばくか体力も回復した。

そして完全に魔力を使い切る前に、魔法を終わらせる。

再生に成功したとはいえ、左肩に張り付いた皮膚は歪だった。

腕は切り落とされたわけではなく全体を砕かれたのだ。

薄桃色の肉が透けて見え痛々しい。

鋭角に割れた骨は髄液を垂らしながらの剥き出し、筋繊維と神経
系はズタズタに千切れて凹凸が激しかった。

枝を折った時の断面図みたいなものだ。

俺は街道の脇に腰を下ろした。

さっきまでの亡者のような活力はなかった。

危機を乗り越えたと確信しているからだろう。

俺は顔を動かして少年の方を向いた。

「いったい、お前は何者なんだ……？」

使えないと思っていた魔法を使うことが出来た。

英雄譚で使い古されたような奇跡ではない。

そんなもの信じちゃいないし、舞い降りてくるほど人物でもない。単純に、魔力が回復していたからだ。

少し体を休ませたからか？

それはない。

休憩すれば魔力は回復するが、いくら俺の魔力量が多くないからといって、六割近くも戻るなんてありえなかった。

薬の類でもないだろう。

あるとき俺は自分が魔法を使えることなんて一言も言っていないし、発動体は見える所にはない。

魔力を回復させる秘薬を俺に使う理由が少年にはない。

なら、なんだ？

何が理由なんだ？

俺以外の要因は少年しかないというのに。

「解るわけねえか」

俺はそのまま、倒れ込んで仰向けになった。

ちよつと前までは灰色の雲ばかりだった空に、澄んだ青色が台頭し始めている。

「ははっ」

死ななかった。

もう、終わったかと思った人生には未だ先があった。

「……………生き延びたぞ、畜生」

俺は久しぶりに、泣いた。

＊＊

「服をください、お願いします」

返答はなく、僕の身体を拭いた女性が、顔を近づけてきた。へえ、と口を尖らせると掠れた音がして空気が漏れる。

フユオ、って感じた。

女性は頬を赤らめた。

「相変わらず下っ手くそな口笛だな」

「うっさい。それよりほら、見てみなよ」

今度はおっさんが顔を近づける。

ほっ、とおっさんは何かに感心のような口ぶりだ。

何だ、何かしたのか僕は。

「お前さんは男だから灰かぶりじゃあないが、泥を取るとなかなかどうして、見れる顔してるじゃないのさ」

女性はどうかやら僕の容姿を褒めてくれているようだった。

とはいえ、喜べるかというとそうでもない。

『かつて僕は。。。だった』

この声のおかげで、僕の中では「この身体は僕のもの」という実感が薄く、どうにも自分ではない他人が褒められているような気がするからだ。

「……ありがとう？」

女性に言っても栓ないことではあるのだが、そう簡単に捨てられる違和感でもない。

首を傾げながらも、僕は礼を言うのだった。

「そこはもっと――」

当然僕の考えが伝わるわけもなく、自信無さ気に聞こえただろう言葉に女性は満面の笑みを浮かべた。

それは女性なりの指導であるように僕は思えた。

最初の水溜まり以降、顔を見る機会はなかったが、ずっと無表情だったか変化が乏しかったのだろう。

こう笑うんだと言っているようで、女性が少しだけ眩しく見えた。

「――嬉しそうにするべきさ！」

同時に、胸に穴が空いてしまったような感覚を抱いた。

突然飛来した虚無感は僕を戸惑わせたが、この感情の名前はなんとなく分かった。

きつと、羨ましいってことだ。

「男の子だろう？」

女性は僕の頬に手をかける。

パン生地のような柔らかさだねえ、なんて言われながら縦横無尽に形を変える頬。

呵々としながら、女性はいかにも楽しそうだった。

「ふあ、ふやめ」

抵抗を口にしようにも、言葉にならない。

男の子だろ、と聞かれたのに、僕はとても残念な感じだった。

堪能したようで、女性の額に汗が一粒浮かび上がるくらいの時間が経つと、僕は解放された。

「ふう……いやー、なんか可愛いねこの子」

斜めに見えていた、ベッド脇にある机や椅子が平行に戻っていた。

それはそうと、余り無視出来ない評価が来たものだ。
さつき褒められたのも、可愛かったが理由ならあの対応は正解だったと言える。

「か、可愛いって僕は男ですよ」

「そんなことは知ってるさ。全身くまなく見たんだから。ふふん、将来有望だよ」

何が将来有望なんだろうか。

ちゃんと主語を交えて言っしてほしい。

僕が考えていると、おっさんと女性は密やかに話し始めた。

小さな声だが、意外に聴覚の性能は優れていたようで聞き取ることが出来た。

「自分で言っておいて何だけどさ、この子、もしかしてアレじゃないかい？」

「アレ？」

「貴族の中に偶にいる特殊な趣味の」

「……あー、たしかに中性的ではあるな」

「だろ？ だからさ、あんまり昔のことは聞かない方がいいんじゃないかい？」

「まあ、色々痛み入る話ではあるか。でもよ、そいつは逃げてきたってことになるんじゃないか？」

「それだったもう少し傷んでいるだろ？ 捨てられたっていうよりも襲われてそのままとかの方が妥当さ」

なのだが、何のことだか分からなかった。

アレ、とは何だろう。

やはり魔法以外の知識が欲しいと思った。

「えーと、服はいつになったら」

おっさんと女性は弾けるようにこちらを向いた。

「あ、ああ用意してあるぞ坊主」

「に、似合うといいね」

何故か口を引きつらせる二人。

しかし似合うとはどういう意味だろう。

僕はあの布きれを返してほしいだけなのだが。

まさかお前には布きれがお似合いだという意味ではあるまい。

「——ん、来たようだね。あんたが知らせたのかい？」

「あれだけデカイ声出して扉を開けたんだ。嫌でも響く」

またしても来訪者だ。

さっきは気付かなかったが、ここは二階らしい。

階段を上る音がどんどん近づいてくる。

女性の時とは違い、静かに扉は開いた。

入ってきたのは僕よりも少し背の高い女の子だった。
彼女の両目は髪の色と同じ赤色に染まっていた。

「……アンネ？ あんたウィリアムのところに居なくても」

アンネは女性に大丈夫、と返すところに向かってきた。
アンネは右手に皿、左手に袋を持っている。

皿から出る湯気はくゆらせているが、風のせいではなくアンネの
腕が震えているためであった。

ゆっくりと歩いてくるのは皿の中身をこぼさないようにしている
からだ。

噛んだ唇から気持ち^{はや}が逸っているのが分かる。

ウィリアムの名の察するところ、似てはいないがアンネは彼の娘
か何かだろうか。

僕が見た時既に死にかけていたわけだが、アンネの様子を見る限
り、あまりいい結果は想像できそうにない。

ベッドの傍にある机に皿と袋が置かれた。
アンネがこちらに向き合う。

僕は口を開いたが、唇を渴かすだけで何も出ではこなかった。
窓を叩く風の音がやけに大きく聞こえる。

ギシギシ軋んでいてこの家が生きているような印象を覚えた。

アンネは跳び付くような勢いで、

「え？」

僕に抱きついた。

「ありがとう、本当にありがとう!」

「え、や……なんで?」

首に手を回されているからアンネの顔を見ることは叶わない。
それでも喜色に満ちていることは声色で判断出来た。

「ウィルが、俺が助かったのは君のおかげだって! だから、だから!」

戸惑う僕を他所^{よそ}に、アンネは言葉を吐いていく。
ウィリアムが助かったということ。

一緒に居た少年——僕が助けてくれたということ。
そのことに自分——アンネはとても感謝しているということ。

アンネは何度もありがとうと言ってきて、打算で動いていた手前
居心地が悪かった。

疲れ始めてから、何度か見捨ててもいいんじゃないかと思っ
たことは口に出せない。

女性は生温かい眼でこちらを見ていたが、アンネが愚図り始めた
頃合いを見て待ったをかけた。

「ああもう。嬉しいのは分かったからさ、早くどかないとその恩人
が鼻水と涙まみれになるよ」

「え。ご、ごめんなさい! 私嬉しくてつい」

慌てて離れるアンネ。

照れくさそうに頬をかくアンネを、女性はにやにやと笑いながら
眺めている。

「しかしまあ、これでもう公然になったわけだよ。男どもは諦めるしかないね。ウィリアムの鈍さが問題だったんだろ？」

「もう、からかわないでよ。でも……うん、ウィリアムが起きたらちゃんと言うわ。今までは待っているつもりだったけど、それじゃ駄目なもの。間に合わなくなって、後悔したくないから」

「いい女だねえ、ウィリアムの馬鹿には勿体ないよ」

死にかかっていたのだから、家族として一言あるのだろう。

この雰囲気からすれば、ウィリアムは嫌悪感を持たれてはいない。馬鹿という単語が出たが、そこには親しみが滲み出ている。

「それに今なら意志が弱くなってるだろうし、きっと狙い目よね」

今の内に心配掛ける父親の手綱を握っておきたいのか、考えは黒かった。

「ま、まあそうだね。押しまくりな」

女性がアンネを応援するが、言葉が濁っていた。

「……おい、アンネ、坊主の服は袋の中か？」

おっさんは話題を換えようしたが、やり方が拙く、後押ししようと女性が便乗する。

両手を叩き合わせ、いかにも名案だという顔をした。

「そうだね。今のままじゃ風邪ひいちゃうよ」

アンネは頷き、眼端に溜まったものを右手で拭くと、腕を振り払って水気を飛ばす。

「ウィルが昔着ていたんだって」

アンネは袋から布をいくつか取り出し、僕の方に投げた。

「そうすると少し大きいかもしれないが……なに、坊主はまだ背の伸びる頃だろう」

受け取り広げてみると少し大きく見えたが、おっさんの言う通りこれからを考えれば大きい方がいい。

下着を履き、服に袖を通すと、服は解れていたり穴が空いたりしていることが解ったが、汗でべたべたの布きれよりも遥かにマシな代物で、最低限の繕いと服という体裁はクリアしていたので、これだけでも助けた甲斐があつたというものだ。

おお、と僕は満足していたのだが、女性とアンネは思うところがあるようで、何やら考えていた。

「……命の恩の礼が、これかい？」

「私もそう思うわ。この袋とお金もあるそうだけど、せめてもう少し服らしくしないと——うん、脱ぎなさい」

「へ？」

呆けるのもつかの間、かなりの早業で僕はアンネと女性に剥むかれた。

他人を脱がすのに慣れているかのような手つきだった。

「そうだ。穴を塞ぐ序ついでにあなたの名前を袋に縫いましょうか。本当なら最初に聞かなきゃならかつたんだけど、ねえ、なんて名前なの？」

ふと思い出したように僕はアンネに名前を聞かれ、そのとき女性
は額を叩きおっさんは失敗したという顔つきになっていた。

名前……名前か。

「こりやうつかりしてたね。聞き忘れたよ」

「俺もだ、悪かったな坊主」

以前の名前は思い出せそうにない。

今即興で考えるにしても、さて、どうしよう。

取りあえず適当に考え、

「——デシーノです。ノクス・デシーノ」

「じゃあ、^{ノクス}noxでいいかしら？」

「……………ええ、それでお願いします」

「……………じゃあまたね。スープ、もしかしたら辛いかもしれないけど、
汗かいたんだから全部飲みなさい」

三人が去っていき、部屋に一人となった。

窓からは朱色の光が射しこんでいた。

斜陽が毛布に覆われた僕の足元を照らしている。

僕は起こしていた身体の力を抜いて倒れ込んだ。

「……………ノクス・デシーノねえ」

僕の名前。

だが、あの時の僕はそんな名前を考えていない。

「誰なんだろうな、僕は」

口が、ひとりでに動いたのだ。

「……」

僕はこの身体とは違う、別の身体が以前あったという確信がある。ならばこの身体は、別の持ち主がいた、僕の身体が変質した、僕が身体を換えるためにだけに作られた、辺りのどれかになるだろう。

口がひとりでに動いたということは、

「記憶の一部に引っかけたか、それとも」

僕以外の意識——元の持ち主が居るか、だ。

悪くない出だしではあった。

それなりの恩を売ることが出来て、印象心証、共に好意的だろう。少なくともマイナスではない。

さっきまでは。

元の持ち主の意識があると考えた場合、名前を答えた時の身体の支配権が奪われたということになる。

今回操られたときは僕の意識があつたが、次回もそうだとは限らない。

「なら、今出てきた理由は何だ？ いや、今出ることが出来た理由か？」

二つを分けるのは今この瞬間にも身体が操られる可能性があるか否か。

何れにしても言えることが一つある。

元の人格にとって、ノクス・デシーノの名は特別であるということだ。

名前に反応したことは、まさか偶然ではないだろう。

名前を偽らせたくなかったのか、ノクス・デシーノを名乗ることに何か意味があるのか。

「ああもう、分からないことが多過ぎるよ」

思考を振り切るように頭をかいた。

魔法について。

自分は誰か。

この身体は誰もしくは何か。

ケースから出る時に傷を負わなかったのは何故か。

そして、ノクス・デシーノ。

ノクス・デシーノが出てきたとき、僕は消えるのだろうか。

「……ああ、そうか。返す、という選択肢もないわけじゃないんだ」

不思議と思いつかなかった。

何でこの身体を僕が手にしたのか、その理由は分からないが、それでも最初に奪ったのは僕の方なのだ。

身体の支配権を奪われたなんて表現は、盗人猛々しい。

それでも、何も分からないまま消えるのは嫌だ。

「急ぐ必要があるか……？」

だが何も出来ない。

自由に使える金銭を得るために仕事を探す。

まずはこれに尽きるが、目的を思えば、この町に根を下ろす気はさらさらない。

「何か……」

適当なものがないだろうか。

理想的なのは、金が得られて、鮮度と精度のある情報が手に入り、幅広い友好関係の割に浅い付き合い。

これに身体を鍛えられるが追加されれば最高だ。

「無いよなあ、そんなもの」

そも、どんな仕事があるのか全く知らない。

『知識』の中に在ったのは魔法が大多数を占めている。

森を歩いている間、眼に入る野草や果実が食べられるかどうか、なんとなく分かることがあったが、見ても何も分からないものもあり、さらに魔法のことほど詳細でもない。

つまり魔法以外のものが『知識』には大して載っていないのである。

当然仕事についてもだ。

想像出来なくもないが、したところで理想の仕事に該当するようなものがあるわけもなく。

「……」

横を向くと皿から立ち上る湯気が見えた。

「冷ましちゃ、まずいよな」

僕は起き上がり、スープを飲んだ。

疑問は多く、けれど答えは何一つない。

真っ暗な道を歩いているような気分になる。

「しよっぱい……」

でも、言われた通りのスープの塩辛さと温かさは、確かに僕が今感じていることで、自分は此处に居ると、そう思わせてくれた。

＊＊

ノクスがスープを飲み始める頃、階下では女性と男性が話していた。

杯に入っているのは弱い蜂蜜酒だ。

女性が提案して注ぎ、男性は既に琥珀色のそれを飲んでいた。と言っても口湿らす程度ではあったが。

「どう思う？」

「どう、とは？」

男性は何故女性が水ではなく蜂蜜酒を選んだのか分かっていた。

男性はまだ今日の仕事を終えていなかった。

ノクスのこともあり特例として認められはするだろうが、仕事が終わってもいないのに酒を飲むのは、あまり褒められたことではな

い。

もつとも、男性は酒に弱いわけではなく、一杯くらいであれば顔に出ることもないだろう。

強いて言うならそれは分別のようなものだ。

最低限のルールという奴である。

「質問に質問で返してトボケンじゃないよ。ノクスのことだ。気づいてるだろ？」

にも関わらず、女性は酒を勧め男性は飲んだ。

蜂蜜酒の度数は13〜14。

高いと思うか低いと思うかは人それぞれだが、飲んだ以上アルコールが回るのは自然の摂理だ。

女性も男性も、饒舌になっても仕方ない、という言い訳と暗黙の了解を得たのである。

「少なくとも嘘を言っているようには見えなかったし思えなかった」

男性は在り来たりな意見を述べ、

「で？」

女性は先を促す。

「ウィリアムを助けた理由も、あんな格好でいた理由も、坊主の過去も正直どうでもいいが、一個だけどうにも納得のいかないことがある。あの森を裸足で歩いて無傷なんて在り得ない」

実りの季節となり、枝葉は樹から落ち始めている。

全てが落ちて無いにしても、雨を完全に遮ることはできず、地面

はぬかるんでいた。

つまり、雲が光を遮り、地面は滑りやすく、その上足元は葉っぱのせいで見えづらい。

虫もいるし獣もいる。

よしんば遭わなくとも、天候と季節を考えれば無傷というのは困難だ。

「そこなんだよ。ウィリアムとノクスを見つけたピータが調べた限りじゃ、靴はなかった。持ち物や身だしなみ、言葉づかいはその人の生き方を映してる。ましてノクスは見つかった時布一枚しか纏っていなかった」

上等ものを身に着けていれば、貴族か騎士かそれに近い者と分かるように。

布一枚は浮浪者か、それとも訳ありか。

「ピータは親切心だったんだろうな」

だが、それがノクスの退路を断つことになる。
言い訳の幅を潰していく。

「たぶんね。あんな子供が森を歩いて来れたってことは、当然靴を履いていたはずで、失くしたら困るだろうから探して、靴なんて無かった。土に残った足跡を辿ったようだけど、少なくともピータが辿ったところまでは跡は靴じゃなくて素足と同じ形をしていたそうじゃないか」

「ピータは何て？」

「不気味、だって。言い触らす気はないようだけど」

ふむ、と男性は頷き、残った蜂蜜酒を一気に仰いだ。

「でもよおお前、あの坊主のこと、気に入っちゃまったんだろ」

「……なんだ、バレてたのかい」

女性はそこで息を吐いた。

「何年の付き合いだと思ってんだ。あのハシャギようが演技じゃないことぐらいは分かるさ」

話が終着点に向かっていっていると分かったからだ。

「——気に入ったんなら、そいつはしゃあないってことだろうが。」

アンネがあのでウィリアムを好きだってことぐらいに、もうどうしようもなく、そいつは助ける理由になるだろうよ」

ウィリアム・アーサーは別に好かれているわけではなかった。

身嗜みに気を使わず、酒癖がいいわけでもなく、性格も大して優れてはいない。

唯一金の羽振りが良かったが、ウィリアムを助けたノクスがあれば、厚待遇だったのは、ウィリアムがアンネ・カッターの思い人だったからだ。

アンネを好いている男達にとっては当然ウィリアムを嫌う理由はあるが、アンネを悲しませないために眼に見えて嫌いになるわけにもいかない。

今まで自分達のアプローチが一切効かなかったことを考えると、ウィリアムを紹介することでしか伝わらず、自ずとウィリアムへの対

応が柔らかくなる。

ジレンマである。

ウィリアムが一番の敵であるのに、ウィリアムと仲良くしなければならぬ。

「だったら坊主が普通でなかろうと、お前が坊主を助けたところで何一つ悪くない」

慣れないことをしている、そんな自覚が男性の中にあつた。
もしかすると今自分は顔を赤くしているのではないだろうか。

蜂蜜酒を一気に飲んだのは、つまり、そういうこと——誤魔化すためだ。

「……ははっ。あんた、詩人だねえ」

女性もまた蜂蜜酒を飲み干し、杯を掲げた。

男性も同じように空の杯を掲げ、打ち合わせる。

小気味よい音が響いた。

こんな話し合いは茶番劇だ。

男性が酒を飲んだ時点で結果は決まっている。

いくら勧められたからといって、飲んだ時点で共犯である。

秘密の共有は、そこで済んだというわけだ。

「——ありがとう」

ノクス・デシーノに陰ながら肩入れするという秘密を。

「うるせえ」

なんてことはない。

男性もまた、ノクス・デシーノという不思議な少年が気に入った、ただそれだけのことだ。

3話―僕思う然るに「我」とは（後書き）

遅れたのはきつと試験のせい。

今回時間が空いたせいか迷走しているような。

最後の男性と女性の話はあんまり自信ないんだよなあ。

なんで気に入ったの？ に対しては第一印象が人助けだったからですね。

と言っても実際には好感度がちよつと上がったくらいですが。

凹凸が漢字だというのが信じられない。どう見ても記号。
ちなみに凸凹でこぼこ、凹凸おうつとなる。

次は「エヴァ農業をする」です。

タイトルはたぶん違いますがこんな感じを予定。

感想、批判、誤字指摘、お待ちしています。

*主人公が下着をもらっていなかったなので修正。

*実りの季節が過ぎ↓実りの季節となり、に変更。

4話―上手に出来ました? (前書き)

遅れたでござる。

良くない傾向だな、エスケープだけはしないつもりだけど。
完結したいし。

タイトルは以前の感想からアイデアを。

4話―上手に出来ました？

村での朝は早い。

日の出と同時に起きて、そのまま鋤^{すき}や鍬^{くわ}を担いで畑に行く。

収穫時期が過ぎたとギルバートさんは言っていたので、畑仕事は手伝わないのかな、とエヴァンジェリンは思っていたのだが、どうやら違ったらしい。

今から育てるのは冬作物だ。

三圃式という農業の仕方がある。

農耕に適した土地を三つに分割し、年毎にそれぞれ夏作物・冬作物・休閑地に振り当てて春小麦・大麦・冬小麦などを生産する方法だ。

土地を全部同時に使った方が効率的だと考えるかもしれないが、当然理由がある。

アジアなどとは違い、北欧や西欧は乾燥気候であるため降雨量が少ない。そのため雨で土に溜まる水分よりも、植物の成長で消費される水分の方が多くなりがちだ。

二年続けて使っただけで次の年には作物が育たなかった例さえあった。

だから養分だけではなく水分を溜めるために休ませる――休閑地が必要になる。

また、休閑地は雑草が生えるので放牧地の役割も果たしていた。牛が幾度も通れば重量^{すき}犁のように畑は勝手に耕されるし、堆肥となる糞は言っまでもない。

休閑地は保水・除草・放牧の役割を自動でこなしてくれるのである。

「うーん、エヴァの身長を考えるとこれくらいの長さが妥当かもしれません」

エヴァンジェリンはギルバートの娘であるクリシアと共に、農具置き場に来ていた。

仕事も色々とあるのだが、適正が分からない以上、一通りこなすことになったのだ。

本来なら息子のダンケンやギルバート本人の方が農具には詳しいのだが、エヴァンジェリンが見つかった時の格好に下世話な推測を立て、同性の方が抵抗が少ないだろうという考慮だった。

最も、エヴァンジェリンは実際にそのような目にあっていないし、年齢のこともあり知識不足だったので、配慮されたということには気づいていない。

ちなみにエヴァンジェリンが村に来てから二日経っていた。

すぐ動くのはよくないと一日休みを貰ったのだ。

昨日の夜はひっきり無しに村の人達が訪ねてきて、肉体はともかく精神面で休めたとかどうかよく分からなかったりするのだが。

顎に手を当てながら立て掛けられた鍬を選別するクリシアを、エヴァンジェリンは眺めていた。

貴族として生きてきたエヴァンジェリンは、当然のことながら農耕についての知識を持っていない。

良家に嫁ぎ縁を築くことが子女の目的であるため、エヴァンジェリンが一応学んだのはテーブルマナーやパーティーでの振る舞いなどの礼儀作法だったのだ。

いざ農耕に身を置いて、エヴァンジェリンは今自分が修めている技術が本当に意味があったのかと逡巡した。

生きるために、華美なドレスや稀少な宝石が本当に必要だったのか。

もつと単純なもので良かったのではないかと。

エヴァンジェリンは二日前の夜、朦朧とする意識中、確かに聞きそして見たのだ。

暗い夜を照らす明かりがあり、人々は笑っていた。

酒を浴びるように飲む男性。

踊り子を囁す女性。

肩を組んで歌う少年。

照れ臭そうに踊る男女。

老若男女、関係なく皆笑顔であった。

荒々しくもあり、粗暴でもあり、楽しそうな笑顔だった。

笑顔とは美しくあれ。

踊りとは上品であれ。

食事とは優雅であれ。

そう教えられていたエヴァンジェリンにかつてない、それこそもしかすれば、吸血鬼になったこと以上の衝撃を与えた。

幼くして叔父の家に預けられたエヴァンジェリンは、ここ数年絵画以外で両親の顔を見ていなかった。

娘を戦争の動乱から遠ざける、などの思惑が両親にはあったが、エヴァンジェリンからすれば、そんなことはどうでもよかった。もつと家族と触れ合いたかったのだ。

数年前に預けられたエヴァンジェリンは今や十歳である。

両親と離れたのがいくつの頃だったかは推して知るべきだろう。

まだ母に甘えたい時期であった。

まだ父の武勇伝を聞いていたかった。

叔父の家では決して一人ではなかったが、それでも心安らく瞬間はあまりなかった。

その環境はエヴァンジェリンを早熟させ、年齢にそぐわぬ思慮を与えた。

だからその光景はエヴァンジェリンにとって信じ難いものであった。

口元を隠しながら相手の顔色を伺う会話術や、音を立てない食事の仕方が途端に馬鹿らしく思えてしまった。

そんなものなくても、彼らは笑っているではないか。
いったいわたしの人生はどれほど空虚な――

いや、とそこまで考えてしまい、エヴァンジェリンは頭を振った。
必要では、あったのだ。

貴族が没落以外で農業をするような数奇な運命がそうそう転がっているはずもなく、三大欲求が保障される貴族には、見栄や体裁こそが生き方であっただけのことに過ぎない。

「エヴァ？ どうしましたか？」

気付くとクリシアが立て掛けられた中でも比較的柄の短い鍬を持って、エヴァンジェリンの前に立っていた。

いきなり頭を振ったエヴァンジェリンに、クリシアは心配そうに尋ねていた。

「あー……木と藁の香りが思っていたよりも強くて」

迷った末、エヴァンジェリンは誤魔化すことにした。

家畜小屋も兼ねていた農具置き場は、在り体に言って臭い。
鼻が曲がるとまではいかないが、慣れるまでに時間がかかるだろ

う。

とはいえ、クリシアは抵抗なく居るのだから失礼になると困る。実際に思っていたことは当然伝えられないので、言葉を選んだのだ。

花を摘みに行きます、と似たような使い方である。

「……………ん——ああ、そうですね。雨でも無ければ毎日来ますから、しばらくすればエヴァも慣れますよ。それより、どうです？ 重くはないですか？」

エヴァンジェリンにとって都合のいい方向で受け取ってくれたクリシアは、内容のため深く入り込まず、持っていた鍬をエヴァンジェリンに渡した。

片手で掴もうとつい思ってしまったエヴァンジェリンは右手だけを差し出しかけ、気づき、慌てて左手を添えた。

節くれた印象のあった鍬は、何かで削られたのか、樹脂で塗装されているのか、持ちやすい丁寧な作りだった。

道具が大切にされていることが分かると同時に、エヴァンジェリンは片手だけで持たなくて良かったと安堵する。

軽すぎる。

思った通りと言うべきか、見た目よりもずっと軽い。

この十倍の重量であっても難無く持つことが出来るだろう。

鍬とは両手で使うものだ。

力の入れ方や姿勢が理由でもあるが、それはつまり重いということだ。

クリシアがエヴァンジェリン用に柄が短く軽いものを選んだとしても、十歳の少女が片手で容易く持っていていいものではない。

まだ上手く使えないな。

強く握りしめてしまい、木の密度が強制的に上がる音が聞こえて、エヴァンジェリンは両手の力をゆっくりと抜いた。

あの夜、エヴァンジェリンは自分の力が一般のそれから逸脱していることを理解した。

軽く叩きつけただけで床が陥没するほどの力だ。

自分のことであるのに恐ろしさを感じたエヴァンジェリンであったが、はて、と疑問に感じた。

立ち上がろうとするだけで床の耐久を超える。

それはいささか、いやどう考えても使い勝手が悪すぎる。

エヴァンジェリンは書物や伝承の吸血鬼しか知らない。

当然会ったことがあるわけもなく、他の吸血鬼がどのように生きているのか検討もつかない。

だが、仮に個体差というものがあるにしても、まるで力を込めたつもりもないのにこれだけの威力を発揮しては生活出来るわけがない。

扉を開けようとしただけでノブをもぎ取り、階段を登ろうとしただけで段を踏み貫き、身動きしただけで服に穴が空き、括約筋ということを考えれば排泄は惨事になりかねない。

何だ、する度に香のついた容れ物を粉碎するというのか。
そんな未来、想像しただけで怖気がする。

だからその、加減が利く……はずなのだ。
そうであって欲しいし、そうでないと困る。

……ん。

この時エヴァンジェリンは自分の身体を覆う「ナニカ」に気がついていた。

と言うより、感じ取ったの方が正しいだろう。

一番近いのは湯浴みをしている時の感覚だった。

水のような薄い膜が身体の表面に張っている。

これか。

エヴァンジェリンは、その水のようなナニカが力の源ではないかと当たりをつける。

今まで見たことのないモノ。

水のようにであり、決して水ではないモノ。

力を込めると、生きているかのようにゆっくりとその部分に集まってくる。

仕組みを完全に理解したわけではなかった。

それでもここから出ることは出来そうだった。

ごろん。

ごろん。

ごろんごろんごろんごろん。

立ち上がろうとした場合、力は垂直に、分散せずに床に押し付けられる。

エヴァンジェリンは、身体を回転させることで床に陥没することを防ぎ、尚且つ作用反作用の法則による加速まで可能にしたのである。

$\mathbb{Z}_0$

30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100.

慣れない行動によってドレスには穴が空き、常識を覆す速度で床を転がり回った結果、汚れと擦過が目立っていった。

エヴァンジェリンの脳髄は生きるという一点に集中されていた。生物としての欲求に原点回帰をしたエヴァンジェリンは、地べたを這いずり回る自分に何一つ疑問を抱かない。

「あぶつ」「へぶう」「ぎやつ」

……家具に打つかつて可愛らしい悲鳴を上げようと、何一つ疑問を抱かない。

そこから階段を降りる（落ちる）際に体勢を整えることに成功し、逃亡する最中村へ辿り着いたのである。

○

思い返すと、筆舌に尽くし難い感情が込み上げてくるが、今は置いておこう。

無言のままエヴァンジェリンを見つめ続けるクリシアは、眼球がガラス玉で出来ているんじゃないかと勘違いしてしまうくらいに微動だにしない。

反応を待っているのだらう。

セシリアと二人きりなのに一昨日の夜のことを思い出すとは、やはり自分はまだ戸惑っているのか、とエヴァンジェリンは思った。

いや、違うか。

これは未練なのだ。

昨日貰ったスープやパンは空腹がいいスパイスとなってくれたが、スープは塩辛いだけの雑な味付けでパンは硬く匂いも強い。

正直不味い。

顔に出ないようにしたものの、貴族の生活に慣れ舌の肥えたエヴァンジェリンには苦痛であった。

……駄目だなあわたし。

エヴァンジェリンは自分の思考が支離滅裂になっていることに気づいた。

農耕が分からないから貴族を貶し、食事が美味しいから貴族であつたかつてを羨む。

このままではドツボに嵌ってしまう。
時間を置かなければ。

またも間を開けてしまい、エヴァンジェリンは疑われないよう努めて明るく返答した。

「ありがとう、クリシアさん。使ってみないと分からないけど、うん、これで大丈夫だと思いますよ」

“大丈夫だ”

まるで、言い聞かせるようではないか。

これ以上深く考えることを、エヴァンジェリンは止めた。

クリシア・ノーベルトは、誰かが村に越して来ても好感を抱いたことがなかった。

三圃式や有輪式重量犁は農業に多大な影響を与え、また11世紀から発生した地球温暖化も相まって、小麦の生産量は増加傾向にあった。

それに伴った人口の増加は、飢餓の類から抜け出せた一つの証でもあったが、糧食の消費量も増え、人々は開墾を余儀なくされた。

クリシアがまず氣に入らないのはここである。

幼少の頃は両親に連れられ、物心付く頃には弟を連れて森に入っていた。

森には様々な顔があった。

朝起きて鼻腔を刺激する香りは一日の始まりを感じさせてくれる。昼の休憩では樹に寄りかかって枝葉の陰で汗を乾かすのがとても気持ちがいい。

夜になると夜行性の動物達が眼を光らせて打って変った姿となる。

家畜や作物の収穫が村の主な収入になっていることは認めるが、それでもクリシアは森と共に成長し、森に生かされてきたという自負があった。

それを余所者は町で生きていけなかったくせに、やれ助け合おうだのと耳障りの良いことばかり口にして樹を切り倒そうとする。

住む場所がない。

お金がない。

最初だけでいいんだ。

知ったことではないのだ。
住む場所が無いなら帰れ。
持参金も持たずに来るな。

初対面の言葉に説得力があるわけないだろう。

輸送の手間さえどうにか出来れば、材木のコストパフォーマンスは高い。

何せ初めから其処らに出来上がっているのだから、作物や家畜の類と違い「過程」にかかる労力が少ないのだ。

クリシア達村人もまた樹を切り倒しているが、それは村長であるギルバートの指導の下、森に影響の無いよう数を制限している。

余所者が金欲しさにひたすら切っていいものではないのだ。

だがそれでも余所者は来るし、ギルバートも拒むことは殆どない。クリシアも子供ではないのだから、その理由が分からないわけではなかった。

祭りの夜に集まった村人の数は百弱。

共同体として多いとは言えない。

いや、少ないだろう。

人口は増加したが、村にはそれに対応しきれるだけの土地も金も食糧も無かった。

見切りをつけて町に出ていく者も多く、上昇傾向にあった人口は町に集中していく。

だが町で生きていくのも容易いことではない。

価値観やルールの差、技術を持っていなかったことなどもあったが、最も人々を苦しめたのは「不安」である。

血縁、地縁がない者同士の集まりに安らぎが生まれるはずもなく、不安に苛まれた者たちの中からごく稀に町から村へやってくる人が

あらわれるのだ。

（この時代に宗教観念が発達した一因でもあるのだが、それはまた別の話。）

一度は村を捨てたような者たちに抱く好意など欠片もない。（気まづかったのか、実際には違う村から出て行った者たちが来ることが多い）

エヴァンジェリン。

果たして彼女はどんなのだろうか。

クリシアは、鍬を振るうエヴァンジェリンを見ながら考える。

「エヴァ」

「はい。なんでしょう、クリシアさん」

エヴァンジェリンは鍬を地面に置いてクリシアの方を向いた。

流れる金髪は上等な絹のような艶があり、瞳はサファイアのようなものであった。（伝え聞くだけで両方とも見たことはないが）

綺麗だと思う。

同時に可憐とも。

エヴァンジェリンを見つけたのはクリシアだった。

弟のダンケンや友人のアインとミナ達の邪魔にならないよう、また身体の火照りを冷ますために一人歩いていた時に見つけたのだ。

空気が止まったとクリシアは錯覚した。

穴開きのドレスに煤で汚れた格好であったにも関わらず、クリシアは樹に寄り掛かる少女に見蕩れてしまった。

「もう少し全身を使いなさい。腕の力だけではなく、足腰も同時に

動かすことが肝要です。あと、急ぎすぎです。勤しむのは良いことですが、それでは昼になる前にバテてしまいますよ」

今まで来た移住者と、雰囲気もおそらく目的も違う少女。触れれば壊れてしまいそうなほど、繊細な印象を受ける。

「しかし、驚きましたよエヴァ。あなた見た目よりも体力がありますね」

最適な動作とは程遠いエヴァンジェリンに、クリシアは当初苦笑しそうになった。

直ぐに疲れて頼ってくると思ったが、予想よりも長い時間エヴァンジェリンは鍬を振るっていた。

流石に癖が付いては困るから、矯正しようと思ったのだが、止めなければいつまでも耕していそうだった。

「そんなことないですクリシアさん。それでも昔は……………」

やんわりと否定してくるのか、それとも自慢するのだろうか。

どちらかが返ってくると予想していたクリシアは、当たっていたことに満足するが、何故かエヴァンジェリンの言葉尻が小さくなって、「それでも」の辺りから聞き取れなかった。

「どうしました？」

「——ん、いえ何でもない。気のせいです。……えっと、鍬はこう使えばいいんですか？」

「もう少し地面を踏みしめるような形で——そう、そんな感じです。筋がいいですよ」

クリシア・ノーベルトは、誰かが村に越して来ても好感を抱いた

ことがなかった。

だが、エヴァンジェリンは安易な考えで樹を切ろうとしたわけではなし、鋏の振り方からすれば村を捨てたわけでもない。

クリシアはエヴァンジェリンの一生懸命に頑張るさまに、嫌いにはなれないな、と思った。

＊＊

「……ご、ごめんなさいウィリアム。よく、聞こえなかったわ。もう一度、お願い出来るかしら」

アンネの表情に浮かんでいたのは愕然であつた。

怒り。

悲しみ。

恐怖。

様々な感情がアンネの身体の中で渦巻いていたが、どうしてこうなったのだろうという疑問が、最も色濃く浮き出ていた。

「アンネ」

びくつと、アンネは身体を震わせた。

ウィリアムはそのことに顔をしかめそうになり、しかしポーカーフェイスを努めた。

少なくとも、この場ではこう言うしかない。

「お前の、『結婚してほしい』に対する返答は、ノーだ」

4話―上手に出来ました？（後書き）

今回の話はエヴァンジェリンが、一生懸命慣れない農業やって、愛くるしさを見せるような話になるはずだったのに。

書いていくと何時の間にか話が暗くなるなあ。

・hack / SIGNってアニメで司ってキャラが「人間はネガティブに物事を考えやすい」とか言ってたし、私が根暗だとそういうことじゃないはず。

作中の農耕や人口増加の話は、調べたのでそれなりに事実だとは思いますが、ところどころ違うかもしれないので真に受けないでね。あとこの頃、休閑地にクローバー植えてたかもしれないんだけど、確定情報が見つからなかったので却下しました。

感想、指摘、誤字報告、待ってます。

*ラストのセリフを変更 君↓お前

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5212p/>

たぶんネギま

2011年10月7日12時39分発行